

麻生路郎主宰

川柳新誌

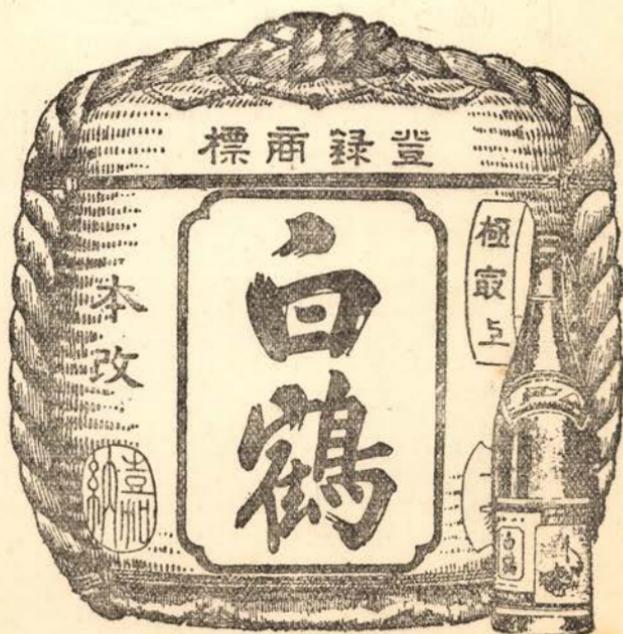
十一月號

清 酒

白鶴禮讚

白鶴の瓶たまることたまること
 白鶴へみんな揃ふたい、話
 い、酒と言へば白鶴持つてくる
 白鶴を一本つけてからの事
 百事意の如く白鶴呑んでゐる
 當選に白鶴樽のままで来る
 貧乏の中に白鶴だけの味

攝津灘
 嘉納合名會社釀





近作

麻生路郎

颯風一過まあよかつたと親子ゐる
この風にこの水に街のヒロイズム
自然の神秘金庫が流れてた
颯風に祖先の或る日想ふなり
家も流れ人も流れて海の月
瓦一枚飛ばぬくらしへ見舞客
蠟燭へ哀話をもつて集まつた
水を逃げて月給だけの人もゐる



川柳雜誌第十一卷第十號目次

通字
表紙繪
故紙
故紙
し平重

文苑

大空へ描く……………麻生路郎(四)

柳翁忌について——川柳三人旅——
劍花坊逝く——誤植に就いて——
身邊雜記のこと

劍花坊を悼む……………麻生路郎(三〇)

川柳の持つ限界(一)……………高須啞三味(二〇)
——主として俳句との限界に就いて——

武玉川二篇研究(六)……………梅本秋の屋(三)

猫々莊瑣談……………正岡蓉(三六)

月評 金・銀・鐵……………閑路生郎、亂艸耽(三一)

自他の話(大西壽伯油繪小展、風と水に流れた會、風水害の對策協議會)……………麻生路郎(三五)

兄弟を語る……………(四)

川柳では先輩 平井春光
鳥打帽子一つで 平井與三郎
僕らの先輩 橋本言也 橋本今日史
舍弟司郎 田中欸乃 蛇を飼ふ 平岩司郎



秋窓漫筆……………山本丹路(四)

武玉川研究落穂(其二)……………綿谷摩耶火(五)

光粒……………安川久流美(五)

五、七、五欄に一矢……………毛利九波(五)

古狸窟雜筆(七)……………梅本塵山(六)

柳壇アリズム……………(英)川柳名家鑑志……………山雨樓(五)

川柳二十日舎の記……………(英)吟行阿波踊……………山雨樓(六)

創作

近作……………麻生路郎(一)

近作柳樽……………麻生路郎(八)

川柳塔……………麻生路郎(三)

粒々集……………柳秀鞍馬(四)

日本名所名物川柳(大阪の巻)中之島……………麻生路郎(三)

一路集……………網引ひ……………橋生路郎(五)

本社柳翁忌句會……………山雨樓……………橋生路郎(五)

各地柳壇……………山雨樓……………橋生路郎(五)

西之町メモ……………縁……………山雨樓……………編輯の窓……………山雨樓(七)



大空へ描く

麻生路郎

柳翁忌について

柳翁忌を全國一齊に二十三日に修したいと云ふ意見に異論はないが、吟社の都合でその日に是非共執行するといふ譯にはいかぬそんな時には忌日を早めて行へばい。

初代川柳の忌名を初代川柳忌にしたいといふ忌名統論が出てゐるが、これは机上學者や事業家などの論で考證や宣傳に便利だといふ以外に何も無い。忌を營むのは祖先崇拜の觀念から出てゐるのであるから自分達に一番親しみのある稱呼を用ひればい。その意味で我社では柳翁忌と呼んでゐる。ふわうすと社如きが提唱するのは生意氣だといふことも耳にしたが、ふわうすとであらうと、どこであらうといふことであれば、尤なことであれば提唱して決して生意氣であらう筈がない。そんなことにこだわる必要は更がないが提唱した以上識者をうなづかせるだけの理由は欲しい。

芭蕉忌なども時雨忌といふい、別名がある。翁忌、桃青忌なども云つてゐる。子規忌は糸瓜忌、頼祭忌などの名がある。子規忌は子規忌がいゝが糸瓜忌も悪くない。頼祭忌は難しすぎる。私などは川柳忌か柳翁忌でいゝと思つてゐるが、川柳忌よりは柳翁忌の方に親しみを持つてゐる。考證や柳論ならいざ知らず、わざ／＼初代代の初世だのとことわる必要はない。そんなことをしなければ判らぬやうな川柳ではない筈だ。六厘坊忌を五葉君が六厘忌と省略してゐたのはどうかと思ふが、調子から云へば六厘坊忌より六厘忌の方がいゝことは否めない。川柳が俳句などと違つて固有名詞から來てゐるので莫迦にされるのだと云つて館坊は川柳を寸句と云ひたいと云つて「寸句春秋」といふ雜誌まで出してゐたことがあり、一部では又川柳のことを短詩と改稱したことも

ある。角戀坊氏は今でも草詩と呼びつゞけてゐるが、それは角戀坊氏の草詩であるから兎や角云ふ必要もないと思つてゐる。見出しなどに「川柳の話」では川柳詩の話にうけとれるから「初代川柳の話」とか「柄井川柳の話」とする必要がある。斯うした文字の使ひ方に對して私はいつも嚮心してゐるが、「初代川柳忌」統一論には遽に同じ難い。

川柳三人旅

九月九日、東都の高須啞二味、品川陸居、山川花戀坊の三君が川柳三人旅と稱して、柿色へ川柳三人旅、白く染抜いた褌をかけて静岡を振出しに、名古屋、大阪、神戸、京都の各吟社訪問、句會行脚を試みた。大阪へは十一日早朝に到着した。驛へは番傘、媛柳、川柳雜誌の人々が出迎えた。東京人が團參めいた褌がけでやつて來た勇敢さには一般人よりも關西の川柳家を驚かした。十一日夜、道頓堀俱樂部で開いた我が社の柳翁忌並に歡迎宴に臨み引續き各吟社の訪問、句會列席、市街見物をされて十七日朝歸東されたが果して收穫があつたか、どうか。草臥れもうけでなかつたことをのぞむと共に遙かに三君の健康を祈る。

劍花坊逝く

九月十一日夕、我が社の柳翁忌（實際の忌日は廿三日）で柳壇の巨豪井上劍花坊氏の訃を知つた。十三日の午後二時から告別式が終焉の地である鎌倉の建長寺内正統院で營まれるとのことだつたので多年の交誼を想ひ、最後の告別式に臨むため十二日の夜行で鎌倉へ向けて發つた。私は十三日朝鎌倉へ着すると直ぐ様建長寺に向つた。

涙の信子夫人、令息令嬢等に久し振りに遇つた。信子夫人は淋びしさうに劍花坊氏の近時の心境、語られた。私も同情の涙をのんだ。告別式は壯嚴に執り行はれた。坂井久良伎翁の弔詞に亞いで故人が主宰した「川柳人」の編輯局中島國夫君の悼辭があつた。久良伎翁は靈前に起つて猶且つ故人の對立者としての柳論かを滔々として陳べ、遺族席をして色をなさしめた。故人は黙して語らず、參列の柳人をして啞然たらしめた。久良伎氏は何處までも詩人たるの態度を保持せられたのかは知らぬが社會常識上故人の靈に對する非禮の罪、大なることを想はなければならぬ。氏が常に説くが如く川柳が社會人の共樂の詩であるとすれば猶更のことである。この點門下中島國夫君が恩師に對し切々たる衷情を披瀝した弔詞に至つて、はじめてホツト溜息を洩らし、思はず涙を催した。これは遺族席ばかりではなかつた。次いで悼句、弔電の朗讀があつて式は閉ぢられた。私は「川柳人」の岡本嘘夢君の悼句「先生と呼べば坐布團だけすわり」に胸をうたれた。葬儀が終ると參列者は型の如くに散つて行つた。私も遺族の方々に挨拶を交はし、嘘夢君に送られて門外に出でバスの來るのを待合はしながらこんなことを考へてゐた。

式は壯嚴だつたかこれが明治、大正、昭和の柳壇に多くの犠牲を拂ひつゝも奮闘努力を惜しまなかつた劍花坊氏の告別式かと思ふと何んだか物足りなかつた。なるほど東都柳人の姿こそは見かけたが葬儀は單なる井上家の告別式に過ぎなかつた。そこが私の

物足りないところだらうと思つた。生前の主義主張は兎も角、川柳を明治に復興せしめるに與つて力ある劍花坊氏の死に對して東都柳人は何故柳壇葬の禮を以てしなかつたのか。東都柳人無しと云へぬのに何故先聲諸君は擧つて葬儀委員たらざりしか。劍花坊氏が徳がなかつたのであると云はれば何をか云はんやであるが近藤館シ坊氏の計に一掬の涙を灑いで建碑の勞を惜しまなかつた柳人諸君ではなかつたか。この點餘りにも感情的だと云はれても遁辭に苦しむだらう。

又私は思つた。

東西柳人の交驛が日に月に旺んになつてゐる今日、日本全國の新聞紙が擧つて報道したこの柳豪の計に接し關西より（私を除いて）一人の會葬者を見ることが出来なかつたのは甚だ遺憾である。

今や劍花坊亡し。かかる愚感の何等益するなきを思ひ私は恰愾として鎮倉をあとしたのである。

誤植について

誤植位厄介なものはない。殊に十七音字の短詩形で一字でも誤植があると神經がビリ／＼と尖つて憂鬱だ。若い時分には熱が二分位上つたものだ。が近來では現在の印刷屋で専門家でない人達が校正するのであるから、まア／＼不可抗力に近いものと諦めてゐるので、熱が昇騰するやうなことはなくなつた。むしろ自分の書いたものや句に誤植がない時には感謝する氣持が湧くやうになつた。これは年のせいかも知れない。よく云へば修養が足りて來たのだし、悪く云へばズボラになつたのだらう。滿洲人が匪賊などにやられても没法子（仕方がない）だと云つて済ましてゐる氣持と似てゐるやうだ。あまりほめた業ではあるまい。大抵そまゝ打つちやつて置いて讀者に迷惑をかけてゐるが、それでも時々是非共訂正して置きたいといふ氣になる。

八月號の不朽洞雜稿「金・銀・錢の句」の中に「昨今白米一升が約二十錢」となつてゐるがアレは「三十錢」の誤植だ。でない」と計算が合はない。それから「寶曆の頃から吉野の全盛妓」とゐるのは「……吉原の全盛妓」の誤植だ。今頃訂正も間が抜けてゐるが、「誤植について」を書いたついでに訂正したのである。

誤植と知らず難句扱ひしたり、名句として褒めちぎつたりするのは罪だ。場合によると感情問題が起つたりする。しかし誤植でなくして誤感である場合もある。これは燃焼が足りないのだから注意しなければならぬ。例へば九月號の「川柳家名鑑志」を見てゐると雅號を用ひず本名で通してゐる人達ではの中に三太郎や雅幽がある。三太郎は幾次郎、雅幽は雅祐だと思ふ。コレはホン一例を擧げたに過ぎないが斯うなつて來るともの「書くといふこともなく、骨の折れる譯だ。

「川柳はりこ」といふ雜誌を見てゐたら

▼訂正 此月號雜文語る語られるの中、ふあすつとに關する、R氏云々の記事、R氏とは「ある氏」或氏の意味にて續月氏、了念氏、

柳坊氏を指示したるにあらざる事を釋明する——「Rは」と考へられた諸兄よ諒せられたい。（ゆきら）

といふ釋明記事が載つてゐる。私はこの雜誌の前號を見ないので何のことか判らぬが釋明するといふ以上かなり青筋を立てられたものらしいが、それは若い人に通有性の無責任な記事を書いたか、燃焼の足りない表現の文字が原因してゐるらしい。ふあうすなども私のことでよくデマを飛ばしたり、無責任な記事で迷惑をかけてゐるが、私はうつちやらかしてゐる。しかし自分等のことだ、と匿名になつてゐても青筋を立てゝゐるらしい。熱のあるのは頼もしいが他人にばかり釋明を要求するある種の勞働運動者のやうなものも反省する必要がある。誤植のことを書いてゐるうちに若い人たちに灸をするやうになつたから、この問題はこれ位にして置かう。

身邊雜記のこと

私はいろ／＼な人の身邊雜記を読むのが好きだ。私のやうに忙しい人間は知己友人を訪ねたいと思つてもつい手近の用にかまけてなか／＼出かけられないが、知己や友人が筆の人である場合、新聞や雜誌にその身邊雜記を連載してゐる時には必ずそれを寢床の中で讀むことにしてゐる。甚だ失敬なやうではあるが起きあがると雜用がついて廻るので床を離れずに、新聞、雜誌、書簡などには目を通すことにしてゐる。時に單行本なども合はせて讀むことがあるが單行本の方は夜半、床に入つてからの方が落ちつくので朝讀むことは稀である。身邊雜記を讀むのは御無沙汰してゐるその人を訪問してゐるつもりで讀むのである。お茶一つ出して貰ふ手數も要らぬので誠に輕便である。ぼつ／＼讀んで行くうちに、彼の感想に對し時に反駁したり、大いに讚嘆したりしてゐる。彼の思想が／＼／＼伸びてゆくのを見たり、事業が發展してゆくのを見たりすると、一人で快哉を叫ぶかと思へば彼の健康がすぐれなかつたり、思想に險惡さを感じたりすると自分も共に憂鬱になつたりする。身邊雜記を讀みながら共によこび共に憂ふるのが私の又身邊雜記でもある。

こんな意味で私は「大阪化粧品商報」に出てゐる食滿南北氏の身邊雜記、「月刊滿洲」にある城島舟禮氏の身邊雜記を愛讀してゐる。南北氏の身邊雜記の如きはいかなることを書き散らしても掲載してくれるので、實に自由奔放傍若無人である。あまりに饒舌なところもあるが、南北氏ならではと思ふものがあつてうれし。殊に病中になほ執筆を續けて、頗る自然に流れ出る死生觀の如きは迫眞方の熾烈さを思はされたものである。こんなことを云つては叱られるかも知れぬが、南北氏は脚本から脚を洗つて雜筆家になつた方がよくはないかと思ふ。そんなことをしたらおまんまがと言下にしりぞける南北氏ではあらうが、そのおまんまがくへなくなるほどの名文に接したいと思つてゐる。今日の南北氏なら勝手氣儘なことを饒舌たり書いたりしてもおそろくおまんまにはぐれることはあるまいと信ずる。大いにやるべしである。舟禮氏の感想にはなか／＼卓絶したものがあるが近ごろは過勞の氣味がある。自重を祈る。



近作柳樽

路郎選

四疊半子供大中小と寝る
改築の圍ひをとれば喫茶店
春雨の不時着へ傘ふえはじめ
賣り物の龜に元氣の出る驟雨
舌鼓聞えぬ方へ風が取り
大掃除香水破れて匂ふなり
執達吏湯殿覗いて見たばかり
まだ白い元吉どんがよく泳ぎ
衣紋掛主は未だに一人もの
色街を酔つて抜ければ通り雨
大金を預る給仕無表情

病ひを詠ふ

神戸

大阪

東京

某人 同 同 同 大同 同 同 同 同 同 同 同 舟



雀・にい・さん・しい・のびよういんあける

N 子 に

きみのさちいのるにカンナもゆるなり
 なん、ま、ん、だ、金と命がほしいです
 警察でなんにも知らぬ兒を降ろし
 工場の設備を母に案じられ
 月遅れ雑誌を讀んで倦怠期
 水薬プロレタリアの歌よまん
 麻雀も強く友達甲斐を見せ
 亡き父の話になつた胃の薬
 朝顔は夫婦喧嘩と別に咲き
 惣領に死なれて老の夜店出
 蚤一つ琴の調子を狂はせて
 組板の音寝轉んできくもよし
 悲觀悲觀墓口を投り出し
 蟬の木の中に病む日の箸をとる
 蜜蜂の花を出るまで見てゐたり
 大阪へ行けばどうにか成るだらう

盛ヶ池

静太

高知

同 同 珍景

神戸

同 同 九葉

大阪

同 同 菊路

八幡

同 同 十七八

盛ヶ池

同 同 浮鬼

大阪

同 同 末廣



御・詠歌の鉦が聞へる涼み臺
 ウインクをしさうに女給水を打ち
 夕立へ女中はじめて皿をわり
 妻若し炊事前掛要る姿
 平凡な生活ネクタイ春のもの
 病人と見られとむない歩きぶり
 座布団を並べて母は晝寝する
 夕焼へみんな奇麗な佛さま

石鐘登山

十錢のあめ湯へ松葉這入つてゐた
 交際ふてみれば無口の朗かな
 寝不足へ蚊帳の釣手をはづされる
 病室の晝を鳴きゐるさりざりす
 煙突がある病院におちつかず
 工場のけむりいちにち雨の窓
 ひとり住みへ寒きころに出逢ふ夜
 金を買ひますとは御門違ひなり
 靴下の穴が焼香氣にかゝり

御戸

金澤

大和

愛媛

廣島

登ヶ池

臺中

富知

同 吉左右
 同 今雨
 同 翠峯
 同 宵明
 同 蛙庵
 同 流之介
 同 耕朗
 同 映珠
 同



秋めいた風に忙しい針坊主
 二階から頭だけ見せて牡丹刷毛
 七夕の造酒に心の清らかさ
 宍道湖に愛のボートがすくわれる
 大望のある身へ消える雲の峰
 引越の荷物の軽いハイヒール
 お月さまゆんべは何處へ行つたの
 たましひの縹帶雲がのびてゐる
 捨てに行く途とは知らず犬を褒め
 水打てば葉蔭の蝶がひらり立ち
 妻の見る女給はどれもこれも癖
 退屈の相手になるも金儲け
 地價などは省線電車知らぬ風
 ネックタイに反比例する暮し向き
 砂の富士にドンネルあける子の理想

亡父五周忌(七月二十一日)

京都	大阪	神戸	今治	愛媛	同	大阪	松江	名古屋
清同	葉同	久同	史同	孤同	噴同	天同	祥同	令同
春	光	米雄	郎	鶴	兒	國	月	風



畫の月ポケット錢の音がする
 指みんな延して觸れる日本髷
 藥湯に膏藥剝いた膚が透き
 暑さを増しに暑中見舞來る
 ギョロリツと見廻し乍ら屑屋來る
 金持といふに利のはしせられる
 ダイビングさつと近づく水の影
 クロームの大きな時計したしまれ
 三振で危機をぬけた投手の齒
 前借のためには襦袢も汚れやう
 満月に庭木發光體となる
 朝鮮の女颯爽とあるくなり
 損得のことより言はぬ父淋し
 捨てられた猫が藝者にひらはれる
 駈ける馬吠える犬には眼もくれず
 雑魚とりの好きも上手も親に似て
 身の上を賞められ仲居鼻をかみ
 雑沓をきれいに掃いた俄雨

神戶 大阪 金澤 廣島 松江 兵庫 今治 大阪 石川

木履 同 利生 同 綠水 同 春帆 同 勁一郎 同 天秋 同 心府 同 素月 同 しとし



西瓜賣り請合つてゐる首の汗
角帽が二人場末でもてゝゐる
樂隊の疲れはじめたラツパの音

山の病院

日昏れてはかなし都會の灯が見ゆる
興奮のまなこそらせば桐の花
三味線を置いて話がつきぬなり
お茶ひいて皆んなの床を敷いて寝る
切符賣場女の指が一つ見え
煩惱即菩提の夜の酒の味
青空へ不幸も何もかもわすれ
女給の神経なんかありません

大和西瓜出盛り

トラツクに西瓜の大和砂ぼこり
貧乏にもう馴れ切つた大駢
着物着てあわてて出れば外交員
死なんとす金魚の命はつとかれ

和歌山

同桑南

幾多池

同縷紅

松江

同雛千代

今治

同輝親

櫻

同歌水

長

同青柿

大坂

同白葉

A 漁港にて



夕焼の廣さを見たり日本海
どつさりが悲しくなつた隠岐の宿

防空演習配給班となりて

腹、腹、腹、二石三斗の飯を喰ひ
空き腹のこんなことにも腹を立て
經ひとつ覺えし母の愁を知る
姉の日に他人となりし家を訪ふ
池はからから豊夫の息があへいでる
矢舁に處女の香りをひめてゐる
氣みじかを笑つて濟ます母でした
昇給へ父の笑顔も久しぶり
巡禮を泊めて和尚の話好き
炭やきの愚痴を巡禮笑ふのみ
テント村寝ながら取れる物がある
若く見立てて仲居返盃し
ホームドレス女の汗を見付けたり
待呆けの男傳言板見てる
晝飯を食へばねむたい癖になり

島根

海外人

京都

白英

神戸

朝雨

今治

紫陽

廣島

同彌生

埼玉

同いね三

大阪

同栗

同

同史呂

同

同寒草

浮城物語

外科専門看護婦の氣が強し
食ふ喋る女の群と乗りあはせ
憧れの女優四五人供を連れ
桶三つ抱へ込んでる晝の風呂
猫の仔のやうに二人の睦まじさ
小學生學校の夜が面白く
忘れ物廊下の影が恐く見え
川風に見知らぬ人と並び立ち
成功をします男の尻からげ
海戦記なかなか艦が沈まない
電話に馴れぬ聲が大きい
蟬ささんかまへ地炎につままれて
金魚の泡を吹つ消す風の青かりし
看護婦の噂熱表の星低し
奮闘を期し階段を駆け上る
來客へ亭主を出した洗ひ髪
幕間ひに花讀み上げる村芝居
どうしても安白粉にとけぬうそ

京橋

同 丁路

大坂

同 雅星

同

同 節子

今治

同 バット

廣島

同 芳泉

鳥根

同 一雄

大坂

同 芳一

今治

同 飄亭

大坂

新市街



夕立をよそに煙草を吸ふ女
 涼臺儲け話は餘り出す
 來る虫をまつて子蜘蛛の聖者めき
 百姓になりたく思ふピルの内
 生きて行く最後の術の牡丹刷毛
 孕猫いたわつてゐる子澤山
 ひとりものばかりの息が蚊帳に滿つ
 鬨病に白髪が殖える二十五
 深水が書きそうな女葭戸越し
 北陸大洪水
 お互に失なつたのだあきらめよう
 洗ひ髪握れば寒き風の音
 病院より久振りに外出して
 病院に歸りますとは淋しいな
 夕立をよけて通れば琴の音
 立話し向ふの松に風があり
 風ころく誰も知らない思ひごと

松江	今治	大坂	徳ヶ池	今治	加賀	大坂	徳ヶ池	高知	泉州	香吉屋	兵庫	今治	高松	徳ヶ池
文	小	一	青	一	義	彩	梨	青	華	三	一	蛇	柳	巷
兒	松	沫	鬼	郎	風	泡	風	雨	坊	八	羊	之	夢	巴



番茶から寛ぎ甲斐のある話

富士登山して

頂上で暑中見舞を寒く書き
 水引と紙に用あり夏羽織
 消える泡消えない泡と金魚池
 愛の巢へ押しかけてくる飲み仲間
 足すゝぐ心地トマトも冷えてゐる
 我が腫うたぐる様な木の葉散る
 ちりばこのしうぎんをする青い空
 美しき月へ化粧の好き嫌ひ
 目を丸くして生活にあこがれる
 値切らせに連れてゆく友酒が呑め

北陸水害

吊橋を残して橋の皆流れ
 カフエーの燈火管制は粹なこと
 ひからびたのどをトマトが流るゝよ
 生きるとは子持女給の厚化粧

名古屋

崙喜固轟

清水

雅龍

奈良

葉魚

今昔

伶人

巖川

琴月

脚戸

木通

榮々池

白蝶

脚戸

勝太郎

大阪

月麻呂

今治

五所

名古屋

呂香

金澤

きよし

大阪

勇

長江

龍之介

今治

國彦



防空演習

防毒面をきて兒も遊びたいと云ふ
パンばかり食べればおめゝが青なるよ

母面會に来る

やつれをば見せまいとする目が光り
サーピスも田舎の床屋少しあり
參圓の繭は手品の様に消え
洋服をぬいで關東煮の味
落ぶれて履歴書だけの達筆家
鬼ごっこ自動電話へ一人逃げ
引き寄せる腕と引かれる三味の夜
瀧の音微かな吐息耳にする
挨拶をいちいちまねて居る子供
泣きつかれ猫も一緒に寝てる午後
防護團見物があり緊張し
色里の灯ともし頃よ月の出て
秋風が女給募集のピラを撫で

大阪

同

豊ヶ池

清水

奈良

大橋

和歌山

名古屋

今治

大阪

同

豊ヶ池

堺

今治

大阪

鼻山
魚水

松生

御穂子

双亭

有魚

百文

笑巴亭

一風

しのぶ

不路子

君子

一柳

松花

いの助



佛壇配達して

佛壇が雛様なればと涙ぐみ
 ヴァージンよ蚊帳は防禦になりません
 應援團勝ち出してから強くなり
 黒襟の唄につまずく日もありて
 シガレットケースパチンと晝休み
 格氣するコツも教へる家庭寮
 看護婦はとがめる言葉どうに入り
 同情をすれば女は涙ぐみ
 安酒に酔ふても酔に變りなし

點呼の爲歸郷

お土産の冷酒に叔父は酔ふてくれ
 美しい顔に似合はぬ大いびき
 弟に負ける將棋を又始め
 療養所爪がのびてく早いこと
 豆させる月給のはしのやうに吸ひ

同

玉格子

金澤

きよ志

高松

廣夫

松江

逸行

大阪

花太郎

同

世間音

豊ヶ池

九紫

廣島

與人

奉天

榮

大阪

三男坊

兵庫

辰夫

大阪

幸公

豊ヶ池

美智子

廣島

碧園



川柳の持つ限界(一)

—主として俳句との限界に就いて—

高 須 啞 三 味

近頃、川柳と俳句の境界線が判らなくなつてしまつたが、それでいゝのか?といふ疑問が、多くの川柳家から發せられたのを聞いた。

併し、それは敢へて新しい問題ではない。東京では、たしか大正七年かに、田中すゝか君が「川柳とは何ぞや」といふ論文を掲げて、東京柳壇に問うたが、當時誰もそれに答へてやらなかつた。それで、すゝか君には未だに判らなかつたと見え、十數年後の今年一月、再び「川柳とは何ぞや」といふ小論文を掲げて、更めて大方諸賢の高教を仰いだ。(柳誌「柳友」参照)が、それにも答を與へるものはないらしく見えた。でその答にもと思つて書いたのが、私の「川柳といふもの」であつたが、所論淺薄、すゝか君の一笑を買つたに止まつたらしい。(柳誌「川柳研究」六、七、八月號参照)所が、東京には、俳諧研究家の前田雀郎君がゐて、既に古く「柳俳一如」といふことを説いてゐたのである。そして、それが、つひに「柳俳無差別論」にまで徹底して來たので、今はその是

否が問題の中心となつたのである。

本誌八月號で、S・U・R氏も問題にしてゐられたが、最近では「ふあうすと」の釜永睡花氏が、その問題をとらへて、「柳壇はどこへ行く」と心配され

「季題を捨て、形式を捨てた俳句が、今や自分達に近づいて來る。小さい川柳が、それを恐れずにあられるか。早く境界をきめる。川柳を定義づけるのは今だ。線を引くのは今だ」筆者要約(「ふあうすと」七月號参照)

と絶叫してゐられる

だが、これは、敢へて川柳家ばかりの問題ではなく、既に日本短詩界の問題となつてゐることで、或る一派の運動者が短詩個々の境界を紊して、短歌と俳句と川柳と、そして或る種の小曲の限界とをなくさうとしてゐることは、去年の暮、文藝界の非常時を「中外商業新報」が連載した時、松山禾矢なる人が、その傾向を論じて

「歌、俳句、川柳の世界にも、非常時はあつた。プロ短歌、プロ川柳などの如く、プロ文學の理論と目的から出發して純藝術を亂さうとした動向もあつたし、川柳を狂句、落首にまで墮落させようとした俗化運動もあつたが、プロ派はプロ文學の没落と共にその生彩を失ひ、俗化運動も永續させずして終つた。たゞ川柳の醇化が、季題なき俳句に近づきつゝあることは、遺憾である」(筆者要約)

と言はれたのを見て、明かである。この松山氏の説は、前の睡花氏の説を、七ヶ月早く伺う側で言つただけで、結局は同じなやみを、地位を變へて言つたものに過ぎない。それほど、今や日本短詩界は、その個々の限界に憚んでゐるのである。——例を、最近の創作から拾つて見よう。

七月の青い夜あけ、びつしより盜汗をかいたうら若いトマト
はある (短歌) 前田 夕暮

廣い草原よ何か音のする草原よやがて十月がやつてくる
(短歌) 太田 薰

蕨一二束買ひおき女も年とつたころもちでなれることができ
て (俳句) 白石花 馭史

百合が芽を出して山の亭が、海が見えてくるのみち
(俳句) 萩原井泉 水

なつかしい聲は郵便屋さんでぬれ手に受取る
(川柳) 河西 白鳥

アイスクリーム屋も風景の一つにカンカン帽を買ふ
(川柳) 鹽見 六祥

我が戀は一つにして悲し
單衣の氣やすき街へ出る (小曲) 西條 八十

草のいろは薄目のある冬
生きるといふ何の事が口笛 (俳句) 中村 昌一

(俳句) 秋山 秋紅 蓼
(短歌) 安河 敏郎

煩雜さを避けるために、これらの創作の發表されてゐた誌名は略させて貰ふが、これらの作品から、その分野を示す括弧の中の説明を省いてしまつたら、諸君には恐らく、これらの作品の分野が判らなくなるであらうと思ふ。これは、事實を示すために、少し極端なものだけを例示したのであるが、たとひ極端な作品とは云へ、これほど短詩の限界が混亂してゐるとは、思つてゐなかつた人が、川柳家などには、多かつたのではなからうか。

併し、これは形式の問題であつて、内容の問題ではない。この形式の問題は、短歌、俳句、川柳、各短詩界に所謂自由律派といふものがあつて、各々理論争闘をしてゐるのであるから、それとは問題を別にしたいと思ふ。すなはち、前述の松山氏が遺憾がられた「川柳の醇化が季題なき俳句に近づくと」といふことも、睡花氏が心配してゐられた「季題を捨て、形式を捨てた俳句が、川柳に近づいて来る」といふことも、主として内容のことだと思へるからである。

所で、雀郎君の早くから「柳俳一如」を説いたのは、その俳諧研究の立場から、主に俳諧史的に見て、柳俳は一如だと説かれたのであるが、それが「柳俳無差別論」になつた頃には、その門下に河柳雨吉君、藤島茶六君等が集つて

春もや、苦きもの置く舌の上
飲みものゝ色も夏めく石の卓
新芽息つきぬくとさの庭となり
前田 雀郎
河柳 雨吉
藤島 茶六

といふやうに、全く俳句と差別しがたい川柳を作つて、中央柳壇に一國を作つたのであつたが、その後やめ吟社、都川柳會が形を失つたからは、これも個々の運動になつてしまつた。併し、現在主に俳句的の川柳を作つて、柳界に問題を提出してゐるのは、やはりこの人達と、その一派及びそれから脈をひく川柳家であると言つても、過言ではないのである。(續く)



武玉川二篇研究 (六)

梅 本 秋 の 屋
 森 東 省 二 魚
 蛭 子 省 二 魚

(181) 人形に惚れて禿はしはられる

省 二 一般家庭にもある事。好きでと惚れての違ひは、禿であるからだ。人形に惚込まれてしまつては、用を言ひつけても役に立たぬ。光木・寸ざし、螢などより、禿は人形に苦勞するのも當然。

秋の屋 二 「しはられる」は誇大に過る。叱られるで宜しからう
 東 魚 二 人形に計りかわつてゐて、用を足さないの、と
 うく縛られるのであらう。廓ではその位の事はあつたかも知れぬ。

(182) 後藤か馬の歸る夕陽

省 二 金後藤でせうね。

秋の屋 二 金坐の後藤家では、小僧が金箱を背負うて運搬したと聴くが、これは遠方に送る千兩箱を附けた馬であらう。後藤又兵衛だなどといふ人がある歟も知れぬが、それは曲解である
 東 魚 二 金を送り果して、のんびりと夕陽をあびて歸つて來

るので、夕榮えの暗れくした光景が想はれる。

(183) 雨あられ雪と替りて日かつふれ

省 二 此句通りの冬の日がある。次ぎくくと降つきて驚かされる。

秋の屋 二 「落れば同じ谷川の水」の歌を採つた句である。
 東 魚 二 「日がつぶれ」は面白い。

(184) 樓船と聞てそつとする冬

省 二 寒風吹きまくる冬のヤカタでは、聞いた丈けで、ぞつと肌寒さを覺ゆる。——世間並はつれた事も風流の一種とはなるが、冬のヤカタは有難くない。

秋の屋 二 「冬の内荒業をする吉野丸」といふ句の如く、冬月になると泥土の浚漉船となり、菜大根の運搬船となる故、全盛を極めた夏月と異なり、其名を聞いてぞつとするのである。

東 魚 二 其のヤカタなら、額を叩いておとも申すところだ。

(185) 針仕事手かるく成て夏近し

省二 古川柳に「針仕事手のかかるくなる時鳥」がある。「手軽く成つて」は單物を着るからか或は縫ふからか。

秋の屋 單物を縫ふやうに成るからである。

東 魚 縫ふ意の方が適切に思はれる。(冬物は夏の中から手廻しもしやうが、浴衣などはすぐ事が済むから、夏近くなつて單物を縫ふのは一般的であらう)

(186) 勘定つくの馬てよめ入

省二 馬で嫁入は田舎家らしい。「村の花嫁鍔打の鞍でく」の如く。勘定づくは計算的だから持參並の嫁。

秋の屋 百兩の持參嫁で、息子殿は心中大不平である。

東 魚 贊。

(187) 鹽氣の抜る蟹のおとろへ

省二 海士は赤ン坊の時から、鹽氣があるといふ句があつた。遺傳だらう呵々。鹽氣がぬけるやうでは定年だらう。おとろへがみえる。

秋の屋 身體の鹽分が抜けるのではなく、海中に入る事が尠くなるのであるから、「鹽氣が抜る」と詠むた迄であらう。

東 魚 斯ういふズバ抜けた言ひ方は、江戸ツ子の喜ぶところ、齒切れがいい。

(188) ふつた所かけいせいのお禪

省二 肱鐵は不立文字。ふられて歸る果報禪。

秋の屋 これを覺後禪といふ。

東 魚 ふられ切つたも禪のはじまり——は如何。

(189) 我身ひとりのやうな神詔

秋の屋 昔より神詔は一人に限つてゐる。「詔」は「託」の誤り也。

東 魚 「やうな」は無くともいいやうな。

省二 「やうな」で一層強めた意。

(190) ういた浪とやむかし人乗

秋の屋 全然不明。

東 魚 豊かな呑氣な時代の波に、昔人は乗つた事であるそれに引かへ今の時代は波の底だ——と云ふ様な意か。

省二 再考せむ。

(191) 山科や集るうちによいおとこ

秋の屋 大石良雄の隱宅に集合する、赤穂浪士の中には、器量拔群の男も居たであらう。

東 魚 前句により、此の稍異常な觀察が、面白味を深めるであらう。

省二 然らむ。

(192) 奢かへしておこる逗留

秋の屋 旅行中に知人より饗應され、その返禮として此方でも饗應し、遂に幾日か逗留するといふのであらう。

東 魚 温泉場で知り合になつたりすると、よくかう云ふ事實はある。「奢」を繰返して軽く咏まれてある處が老巧である。

省二 奢の應酬。愉快な逗留。

(193) 夕貞咲て井戸端の帯

秋の屋 夕顔の花咲く頃、行水をする爲に裸體となり、帯を

井戸側に掛けて置くのである。

東 魚 〓 原本「井戸端」ではなく「井戸堀」である。夕方井戸堀が仕事を仕舞ひにして、着物をさるとの意であらう。

省 二 〓 此誤植は面白い。前二説のいづれにも解し得られて良い。

秋の屋 〓 誤植ならば前説を取消するが、井戸堀よりも、井戸端の方が、面白があると思ふ。

(194) 飯入て少賤しきあま小舟

秋の屋 〓 蟹小舟といふものは、和歌にも詠まれて風雅なものであるに、それに乗込む漁夫は、荒業をする故に大飯を食ふ、それが少し賤しく思はれるといふ句であらう。

東 魚 〓 上五は「飯入れて」あらうか。飯櫃の意味か。

省 二 〓 私「飯入れて」と讀むでゐた。

(195) 初老のまた堅縞をはなれ兼

秋の屋 〓 四十歳を「初老」といふ。商店の手代が四十になつても、未だ主家に起居して、新一戸も構へず、堅縞の綿服を身に着けて、立働いてゐると云ふのである。

東 魚 〓 やがて「化けさうな花翠の出る駿河町」となる。

省 二 〓 「吳服店天命知つて女房もち」で、神老の堅縞も天命となれば、——それ迄の辛抱だ——店の主人公となれよう。

(196) 夜に飽初は奥の紙きぬた

省 二 〓 蛙の音を聞き眠に入らず、夜の長さを思ふ。(追記)
「夜ルにあく初めは奥の紙きぬた」とよむたが。
東 魚 〓 「飽ル」であらう。場所は奥州、紙粘だけに更に旅の

わびしさが思はれる。「風流のはしめや奥の田植唄」の句調にすがつたやうな趣がある。前句が芭蕉を連想されるやうな句であつたのであらう。今氣が付いたが「夜々」ではなく、原本「夜に」である。「あきる初は」であるから、「夜に」が意味合からも首肯出来る。

秋の屋 〓 搦衣は和歌でも俳諧でも、秋の夜に入れてあるが、紙粘には時の別がない。併し此句は秋夜長の情景である。

(197) 風も生れのまゝの材木屋

東 魚 〓 山で立木であつた時も、風にふかれてゐた。材木屋の店に立ち並べられるやうになつても、生きてゐた時と同じやうに、風に吹かれる。材木の立ち並んでゐる光景から、こゝ詠んだのであらう。

秋の屋 〓 前解の如くであらうが、中七の「生れのままの」は何とか外に言方があらうと思ふ。

(198) 五人に問へは五色な墓

省 二 〓 五人五色十人十色。(飄型、陽物型など珍奇なものもある。下戸は墓の型など考へぬといふ句があつた。上戸は取越苦勞的な風流だワイ)。

東 魚 〓 私も墓の型が、大體何種類位に分けられるか、やつてみたいと思つた事があつたが——請負人の仲間入りをしてしまつたので、とても駄目——墓と千偏一律のやうだが、色々種類があらう。

秋の屋 〓 上戸の墓に、飄型、樽型等は珍とするに足らぬが、下戸の墓に饅頭型、大福餅型といふが無いであらう歟。

(199) 哀れさは千兩箱に鯉ふし

東 魚 〓 千兩箱の古手に鯉節が入れられてゐる。千兩箱もさ

うなつては、哀れなものさと云ふ諧謔であらう。

秋の屋二昔、私の宅では、千兩箱を銅貨入に用ひたが、外に利用の出来ぬものである。

省二千兩箱は繪畫が芝居で見た外知らず——机邊の猿屋楊枝箱には、金千兩と書てある。呵々。

(200) 六はらにしくしりそうな顔斗

省二訴訟裁判を取扱つてゐたからか——六波羅探題か。

東魚清盛入道注文が六ヶ敷いから、氣に入るやうな美人はない。皆及第しさうな顔はないといふ意であらう。「西八條に困るに入れ——文句は違ふかも知れぬが——」といふ句かケイにあつた筈だ。

秋の屋二「しくじる」とは、或る事をしそこなふことであるから、妾の目見えに及第しないのではなくて、六波羅の役所に召喚された、市民 あると思はれる。

(201) 帆揚てから咄なくなる

東魚帆を揚げて、船も愈々航海の本舞臺がかかるやうになると、乗込む人々も、座にも落付き、漸く海路の單調に飽く心持ちて咄もなく、一抹の淋しさが漂ふ光景。

秋の屋二船客等も睡眠を催はして、孰れも船を漕ぐのである省二かなり船出すると、世間咄も段々なくなつてしまふのは、特に夜の航海では顯著な事だ。

(202) ちぎれくりに石燈籠つく

省二飛々にある石燈籠へ、次ぎ／＼に燈がはいる。

東魚石燈籠が、笠、火袋、臺石と別々にして、運搬して來ると云ふので、「つく」は着くであらう。

秋の屋二春日の社頭などで、多くの石燈籠の中に、火の入る

のもあり入らぬのもあり、ちぎれくりに見ゆるのが、却つて詩趣が有るのである。

東魚お説の如くだと「とぎれくりに」とありさうなものと思ふ。

(203) 草履打片く足を洗ひけり

東魚草履片方を脱いで相手を叩いた。片足だけ跣足になつたので、片足だけ洗つた——事實さうでなくても、「草履打は唯片足だけ洗つた事でござんしやう」といふ洒落氣分とみてよろしからう。

秋の屋二實際に有る事であらうが、句としては價値に劣しいやうである。

省二加賀見山狂言にあてはめ得らる。

(204) 汐曇はれて主なき桶ニツ

省二汐氣のため海上が曇る。その汐曇が晴れた後に、主なき桶が浮いて居る。その光景や思ふべしだ。

東魚汐曇がはれて、霞のはれ行く濱邊に、汐波の置きすてた桶がみゆる。霞む濱邊に桶を點出した處は、繪畫的に想像し得ると思ふ。

秋の屋二謡曲「松風」が聯想される。

(205) 青物や玉子の色の目にかはき

東魚明解が出来ぬ。玉子の外は皆うるほひのある濡色を呈してあるが、一所に置いてある玉子だけ、著しく乾いた色に眼を刺戟するが、とも云ふのかと思ふ。

秋の屋二青物屋に於ては、雞卵を賣らぬのであるから、前解も適切でないやうで、不可解の句である。

省二絶対に青物屋では卵を賣つてゐなかつたのであらう

か。

秋の屋 現代では青物屋でも卵を賣るが、明治の初年までは(東京では)決して賣りません。

東 魚 再考するに、永い航海中或は航海から戻つた時の心持を詠んだのかと思ふ。青物や玉子といふ陸の食物に焦がれてゐる心持ちかと考へる。

(206) こよりと聞て起る狸寝

省 二 狸寝の鼻へこよりを入れるのは妙策。

東 魚 輕妙。

秋の屋 古川柳にも類句が有つたと思ふ。

(207) 伐られぬ卯木九日にさく

東 魚 「卯の花挿す」と云ふ行事がある。「四月八日、江戸にて諸家佛生會に捧ぐるため、卯の花を門戸、又は佛前に挿す」と。此の花を市中に賣歩くを卯花賣といふ」と俳諧辭典には説明がある。八日にはまだ咲いてゐなかつたので、その卯の木は伐られなかつた。それが一日違ひの九日咲いたときわどい觀察をしたので、奇智的の句構である。(實際は八日に咲いてゐたのであらうが、伐り残された九日の卯の花を、これは今日咲いたのだ、と云ふ風に云つたものである)。

秋の屋 五日の菖蒲、十日の菊を根據とした句構で、無論八日にも咲いてゐたのである。

省 二 「卯の花の八日は早き夜明かな(斤互)などに對照し九日にさくは思當るわけ。

(208) 唐扇の自慢をしたる通り雨

省 二 通り雨を除けてゐる間、所持の唐扇の自慢話か。それとも、通り雨を唐扇に因て除けて行くのを、自慢に話すのか

(唐扇を詠むだ句一つ、唐扇風は大和をそよく也―松翠)

東 魚 是ら〜と過ぎた雨に、かざした唐扇は一寸位ぬれても平氣だと云ふのであらう。(水團扇のやうな紙質なのではないか)。

秋の屋 昔の唐扇といふものは、漆か脂の如きものが引いてあつて、水に濡れても紙は破れなかつたのである。

(209) 橋守の煙の高きわかれ霜

東 魚 橋守の佗しい生活も、春になつて春らしく朗かに、煙が立ち昇つてゐる―橋には名残の霜が、旭に乾いて陽炎が立つてゐると云つた光景であらう。

秋の屋 霜が旭に乾いて、陽炎が立つたのではなく、霜が薄く橋上に置いたので、春色漸く闊なる光景である。

省 二 八十八夜に霜あり、其後はなしと傳へられて、別霜と稱す。「煙の高き」は春色を示す。

(210) かる焼の忍ひ心はしめり合

省 二 輕燒煎餅のしめるのを、忍び心とみたら妙。

東 魚 輕妙な言廻はしである。

秋の屋 此れは俳諧の特色で、川柳には詠まれぬ所である。

(211) 帆におそはつて傘は賣行

東 魚 帆の方向によつて雨を知る。あの風向きでは雨だ。傘を用意しやうと云ふので、傘が賣れると奇抜に云つたのではあるまいか。

秋の屋 前解のやうであると、餘りに技巧を弄したもので、詩趣に劣しい句である。

省 二 理窟の分子が交るから、面白くない。

(212) 烏帽子斗て生て居る顔

省 二 烏帽子を頂いて居れば、猿のやうな御面相でも、引立つて生彩が出る。シルクハットなども同様。

東 魚 貧様な神主などが連想される。

秋の屋 如何にも面白い句で、現代の辻賣卜も此の型である

(213) 惚られた事を思へは氣か抜て

東 魚 昔のぼせてゐた時代を思へば、馬鹿げて張合もないと云ふ意であらう。(拙吟に「添ひ逢げる氣でゐた頃の馬鹿ら」さ)がある。

秋の屋 老人の懷舊で、古を憶ひ今を嘆ずるのである。

省 二 惚れた事よりは、られた事の追憶が、一層と「氣が抜て」であらう。拾遺戀の部には「かみしめて見て味の出るふつたやつ」

(214) 地紙うり笠着る時は物詣

省 二 地紙を賣りに出る時は、笠などかぶつてゐては、商賣は出来ぬ。

東 魚 油壺から出てあるく男振りを見せねば、お客が承知しない。

秋の屋 如何にも左様といふ可きで、含蓄のない句である。

(215) さきくに世はかはる呑喰

東 魚 時代と共に食物も、色々變れば變るものだと云ふのであらう。牛肉だつて明治の初期には眉をひそめた連中が多かつたに違ひない。

秋の屋 時代の推移と共に、最變化するものは、衣住の二つよりも、食物であらうと思ふ。

省 二 カクテルからトンカツなど、巾を利かす世の様々の移り變り。興味ある事だ。

(216) 咄しにも千人切は多過て

省 二 千人切はホラが交る。千人斬るのでも大抵でない。(千人斬は千願あつてやるのではある) 千人切とは多數の謂。辨慶の千人斬。諺にも「千人伐」がある。

東 魚 句の輕味が連句中にあつて、愈々其味が深からう句である。

秋の屋 荒木又右衛門の三十六人斬なども、講談師の扇から叩出したもので、千人斬は猶更である。

(217) 病人の手へしつとりと秋裕

東 魚 夏から秋へかけて病む人の、ヒンヤリと秋裕を身にふれた淋しみをかう詠んだのであらう。

秋の屋 初夏の裕は、身に輕快を覺えるが、病人の秋裕は、淋しさを感じるであらう。「しつとり」といふ語がよく利いてゐる。

省 二 病弱な私には、此句の經驗が餘りに多い。「帯のさき猶あまりあり秋裕」なども、いつも感ずる處だ。

(218) 大江の岸を浮て行下駄

省 二 大江は天満橋八軒家附近の古稱。淀川口斯るところへ下駄が浮いてゆくと、人の注意をひかずには措かぬ。

東 魚 成程、今でも大阪市廳舎の處は、大江橋といふ電車停留所である。今の大江橋は天満橋よりは、一寸下流である。句意は前句によつて心中者でも句はしてゐるのか。

秋の屋 「大江の岸」といふと、何と無く名所のやうに思はれるが、此處の水に流れて行く下駄にも、因縁が有りさうに思はれる。

日本名所名物川柳

大阪の巻

十五「中之島」

麻生路郎選
大西長三郎畫

日銀の窓へ川風たまに吹き	萬よし	網持つて外野が走る中之島	清美
圖書館に行く顔ダムであてられる	九天	戀でないポートも浮ぶ中之島	友帆
號外が走つて抜けた中之島	久米雄	肥後橋に女中同志は國の事	萬よし
中之島外交同志愚痴を聞き	素月	切れ話水の黝む中之島	花戀坊
切れる氣にやうやくさせる中之島	某人	中之島ぼんち抜道ちと急ぎ	陣居
中之島縣人會の折を提げ	耕之介	中之島二人の心水にゐる	同
中之島煙草を濡らす水が飛び	末廣艸	中之島端か端へ二人連れ	啞三味
中之島煙草三本ゆすられる	まさを	戀人を待たしてすまぬ中之島	聞路

後場までの足をのばした中之島

申仙

ほつとした正十二時の中之島

聞路

圓屋根の錆に中之島はしぐれ

四路平

中之島に住み兄弟と呼んでゐる

観月

中之島情死の出来ぬ人通り

夕鐘

中之島晝の女は腹這ひぬ

青踏

中之島ノ一ネクタイで秋の午後

溪花坊

中之島二人をかくす蔭がなし

蝶之助

中之島ばかり低空飛行の日

同

中之島閑な株屋を裏から見

豆秋

大膽な姪を見つけた中之島

蝶之助

圖書館の欠伸を溜めて中之島

文久

夕焼はエキゾチックな中之島

鮎美

戀人とボート流した中之島

靜波

中之島今日は昨日の下駄を賣り

啞三味

中之島身の振り方へ蟹が匍ふ

豆秋

政見にあきれて歸る中之島

亂取

働けと一時が鳴った中之島

青踏

中之島家の小僧をまた見つけ

梅子



劍花坊を悼む

——柳翁忌句會の夜に——

麻 生 路 郎

毎年一回開催されます柳翁忌に際しまして「物故川柳家を語る」と云ふ題下に私がお話をする事になりましたがもと／＼この題は案内状を貰つて初めて知つたやうな譯であります。たま／＼東京から川柳三人旅の高須啞三味、品川陣居、山川花戀坊の三氏をお迎へし、そのおあいてをいたして居りましたので「物故川柳家を語る」事に就きましては深く考へる時間を持たなかつたのであります。

演題そのものから云ひますと至極く廣い意味になつて居りますが僅かの時間に日本全國の物故川柳家を語ると云ふ事は不可能でありますし、同じやうな理由で關西だけの物故川柳家すら語ることが出来ません。結局我が「川柳雜誌社」の物故川柳家を語るのが穩當かと考へられたのであります。それが、それすら前述のやうに時間がなかつたので秩序のあるお話をする譯にまゐりませんので、本年の十二月が三回忌にあたる木村晃卓君一人の事を少しくお話しして見やうと思つて居たのであります。

しかるにこの席にまゐりまして本日の夕刊を見せられて

はじめ知つたのでありますが今朝鎌倉で井上劍花坊氏が亡くなつてゐられます。氏は明治柳壇の中興の祖として弘く天下に川柳を唱導された方でありますから、木村晃卓のお話は他日に譲りまして今夕は井上劍花坊氏の事に就きましてお話し致しませう。

井上劍花坊氏は名は幸一、柳樽寺劍花坊と號され、柳誌「川柳人」を主宰されて居ります。我々の川柳が明治に復興いたしましたのは坂井久良岐、井上劍花坊、その他の人々の努力もありましたが劍花坊氏の健闘に俟つところが大きかつたことは誰人も否むことが出来ません。關西の川柳家で劍花坊氏と一番深交のあつたのは斯く申します私で明治、大正時代には手紙の往復をよくやつたものであります。劍花坊氏が始めて來阪されにのは大正四年、今から二十年前であります。私の長女純子が生れて間のない頃のことでありまして私が上福島中一丁目に住まつて居た時でした。驛へお迎へに行くと、劍花坊氏は劍客のやうに堂々たる風采で羽織袴に紺がすりの足袋をはいて居られました。

劍花坊氏の説によりますと家庭で作られたものなさうです。その頃大阪で紺がすりの足袋をはいてゐる人は見かけませんでした。それで梅田の驛の向つて左側の出口へ迎ひに行つた私は直ちに劍花坊氏を發見する事が出来ました。之が私と劍花坊氏との初めての會合でありました。それからすぐに私の上福島の家へ行き大阪が見物したいとの事でしたので市内見物に出かけたのです。今でも靜かに考へますとその頃の事が判然と思ひ出せるのです。そしてその當時あつた樂天地へ行き記念撮影をしました。

私は浴衣でまるで國木田獨歩の様な風をしてゐましたし、劍花坊氏は紋付姿で寫眞を撮りました。それから飯をたべるのに丸方へ案内せよと云はれました。今はビルになつて居ますが大體丸方は田舎者殊に團體の行く所で、もとは木造ではありましたが堂々たる構えでした。それで地方的にはよく知られてゐたので劍花坊氏の頭にもあつたものと見へます。その頃は小さいけれども料理のよい二鶴へでも案内するつもりで居ましたが、お客様は注文とあればこちらは何處でもよいので丸方に行く事にしました。そしてたしか魚鍋で一盃傾けたと覺えて居ります。

その時句會をしたかしなかつたかは明かではありませんが、しなかつたやうに思ひます。劍花坊氏は萩が故郷で、故郷へ歸られる途中大阪へよられ私にだけ會はれたのです



その當時「雪」と云ふ雑誌を發行して居たのでありましたがその時「雪」が出て居たか出る少し前か判然といたしません。劍花坊氏との句會は私の江戸堀時代に柳誌「土園子」を刊行し、大阪川柳社の名で南堀江の大阪出版組合の事務所で句會をしました。その頃劍花坊氏のお迎へや歡迎に走りまわつてゐる時、私の二女が患ひ死にました。私の阪神時代には苦樂園に泊られた事もありました。句會は天王寺逢阪の廣田屋で雨の日に句會をいたしました。二度目に劍花坊氏が來られた時には宗右衛門町の多喜の家に泊られました。そして日車、柳珍堂、游二郎等と多喜の家から舟を出して藝者をつみ込み、大川の夕涼みに出掛け劍花坊氏を歡迎したのでした。劍花坊氏は随分はしやいでゐました。その時の歡迎が東京の文壇人が大阪へ來て一番旺んな歡迎を受けたのだと云つて居られました。今夜の私の兼題が「中之島」であつたので、

劍花坊氏が亡くなられたとは知らず三人旅の方々に劍花坊氏のお話をしてゐたところでした。その後私は東上の際に劍花坊氏の高圓寺の宅に泊められた事もあります。その後、川柳以外の用件で來阪され、私が「川柳雜誌社」の十周年句會を東京で開催した時に、東京の各吟社の句會から離れて活動されてゐた劍花坊氏も特に出席せられ好

意を寄せられたのであります。又今春きやりの十五周年句會が四月の三日に淺草の本坊で行はれました時にも劍花坊氏が出席せられたので遠隔の地にゐるにかかはらず比較的近々に會ふ事が出来ましたが、これが同氏との最後であつたのであります。その時の事を少しくお話ししまして。きやりの句會へは我が社から六名出席致しまして山雨樓氏が會場で我社を代表して挨拶を述べる事になり、私は選を依頼されましたので別室で選句致して居ましたが會場の方は大變賑やかでした。その時その別室に残されたのが劍花坊氏と久良伎氏と私の三人でした。どんな拍子に出た話か知れないがその時に劍花坊氏が私に

「路郎君、僕が死んでも金を集めて碑を立てる様な事はして呉れるな」と云はれたのでしたが私は選をしながらも私の持前の答へ方です。

「そんな事を云つても死んで了うたら僕がどんな事をしやうと止める事が出来ないだらう」と私は云ひました。そうすると久良伎氏は

「僕はそんな金があるのなら今僕に呉れ」と云はれました。こんな事をお話するのはどうかと思ひますが、兩氏の性格の片鱗がこの短い言葉のうちに窺へると思ひます。今から考へると死を豫感されてゐたやうな話だと思はれますのでお話ししたのであります。

句會も終り神田明神内の開化樓で七十餘名が祝賀懇親宴を張る事になりました。別室で開會を待つ間に劍花坊氏に色紙短冊雅帖などを持つて行つて書いて貰つて居た人がありましたが、大抵劍花坊氏はことわつて居られたが是非と

いふ希望者もありましたので止むなく筆をとつて、一字々々書き並べるといふ氣の毒な揮毫振りでした。しかし劍花坊氏は手が振うて巧く書けない、私が傍から見てゐて以前の豪放な筆力が見出せない、全く何時もの字ではないので手が振はなくなつてから書かれてはと私がとめたので中止された。

そして呉れんも健康をとりもどす様云ひましたら、劍花坊氏は私の顔を眺めて路郎が又いらぬ世話をやくと云つた風で淋びしさうに笑つてゐました。

今夕我が社の柳翁忌に際し時を同じうして（勿論柳翁忌の實際の日は廿三日ですが）劍花坊氏の死を知り感慨無量のものがあります。行年六十五、柳翁の年にはまだ八年もあります、劍花坊氏は實に古きを温ね新しきを知ると云つたやり方で我々としてはまだ元氣で居て貰ひたく思つて居たのでした。

劍花坊氏は私が昨秋、本社東京句會で力説いたしましたやうに川柳のためには尠からざる犠牲を拂はれた人であります。この大先輩の徳を欽慕し最後のお別れをするために私は明後十三日葬儀に參列の爲明夜行で鎌倉へ立つ事を述べて故人の靈をなぐさめたいと思ひます。

柳翁忌に際し「物故川柳家を語る」と云ふ題下ではからずも劍花坊氏の死に遇ふ事は何等かの機縁によるものと思はれます。衝撃が餘りに大きいので充分に意をつくさない點がありますが、突嗟の追懷を遙に故人の英靈へ捧げて弔詞としたいと存じます。

（日野華水筆記）

（寫眞は本文前段にある樂天地における記念撮影）
向つて右故劍花坊氏、左路郎氏）



評月

金

★

銀

★

鐵

麻生路郎 阿部閑生
住田亂耽 西田艸樂

近作柳樽より

粉薬の折目をたどる退屈さ

貴代志

艸樂——新味とか深味とか 内容とか云ふのでなく、巧みな叙法で、療養所の静かな退屈な空氣が、あざやかに出てますね「折目をたどる」と云ふ叙法がうまい。

閑生——二句ともいゝですれ。「煙草屋の奥から本を伏せて立ち」の句も。弱々しい感じがしますが、言葉にソツがない。

艸樂——その點だ。

路郎——非常に静かな観方ですネ、作者が少しもバタ／＼してゐない。實に静かな心境がうかがえる。

亂耽——「たどる」がいゝ。時間的に非常に効

果をもたらししてゐるので。

路郎——殊に自已寫生としては、叙法と言ひ見付け方と言ひ凡手でない。

艸樂——とにかく巧い。

路郎——慾を言へば「退屈さ」と云ふ表現が拙い。

艸樂——新らし味がなし常套的な處かれ。一寸投出した様ですれ。

かまきりの飛ばんとするかなしかり

愚 寵

亂耽——かまきりが飛ぼうとする姿を見てひよいと悲しくなつて、作者自身の姿が、かまきりの姿に變つて、作者の涙が、かまきりの目の玉に宿つてしまつてゐる。淺ら飛躍しやうと思つても、所詮かまきりの如き作者

自身の姿をもつて、この句からしばし目を離されなかつた。

艸樂——螢ヶ池の句は感傷的なのが、多い中に、かまきりの感じの中に自分を没入した表現が變つてゐるけれど境地はやはり變らな。この句のよきは生々しい事を表現せず、かまきりに十分自分の心持を寄せた點だ。かまきりの瘠せた姿は、バツタなんか反して飛ぶのに不自由な處があつて、そこに作者の姿を思ひ出す効果をあげてゐる。

路郎——叙法の上からだが「飛ばんとするやかなしかり」と云ふ感傷的な甘い表現よりは若し私がこの句を作つたとすれば「飛ばんとするを見てあたり」とたゞ投出しておくれ。この句が下手な意味ぢやない。亂耽が云つた

感じは、分出てゐる。けれどこれは、若くして病む人達と、相當の年月を世にもまれてきた僕との、境地の差でせう。

艸樂——句としてはさうありたい。けれど蝸ヶ池の人は境遇上物の見方が深刻になつてゐる。そのために強く「かなしかり」と言つて他の言葉では物足りないのではなからうか。

路郎——強いと言ふ意味からであれば「かなしかり」と言切るより「見てゐたり」と放り出す方が強い。僕がこんな事を言出したのは私の若い頃に短歌の方で「かなしかり」と云ふ用語が盛に使はれた。それで川柳の方でも明治四十五年頃だつたか、新らしがり屋が盛にそれを眞似た譯でもあるまいが、使ひ出した、さう云ふ先入主があるために、さう云ふ甘い言葉が物足らないのだらう。

艸樂——僕は「大禮」かなしかり」と云ふ敘法は、無闇に何でもかんでも悲しくしてしまふ句に多いので、目をそむけたくなる。内實的な深さは「見てゐたり」の方がいゝ。悲しいは限定されてしまふ。

足洗ふ波が目高にさからひて

耕 一路

艸樂——川柳として比較的新しい方面に關心を持ち出した句の一つ 新らしい社會觀や

人生觀と云ふ意味でなく、軽い田園の敘景的な句、田舎の夏、野良から歸つて、小川で足を洗つてゐると、波にさからうて目高が出てくる——

路郎——目高の句にはもつといゝのがある句は忘れたが「目だけ見える」と云ふ様な句があつたんだが。

艸樂——やはらかい田舎の情景で、巧妙なとかうまい句とは云へないが。

閑生——「さからひて」の止め方にしては、その語がきいてゐないと思ふ人ですが、目高に對して足を洗ふが大きいすぎる、何だか矛盾を感じますね。

艸樂——目高の習性は、人間をおそれない、すぐ傍へ寄つてくる。

路郎——逃げやしないか。

艸樂——水面近く漂うてハシコク 逃げませぬね。

路郎——列をなして、一群をなして——

閑生——目高の群が混亂してゐると思う。混亂しては何の意味もありませんね。

艸樂——僕のくになんかですかう云ふ 經驗がありますね。

閑生——艸樂さんの自己體験だから間違は

ないでせう。自説は引込ませう。(笑聲)
路郎——それでも味が少ない。
艸樂——明るい田舎風景 想像の句でないでせう。

こゝらから惚れる砂踏む撮影所

大 門

路郎——大門氏の句はうまいね。この句なんが一寸眞似が出来ない。

閑生——時々作り過ぎる處があるんですよ。

路郎——技巧が勝ち過ぎたね。

艸樂——然し器用ですれ。

路郎——表現がうまいから、他人の様に道具立が多くなつても味がある。これなごもうがちなんだが、これ位な所で行けばいゝと思ふ

艸樂——あくごくりませぬね。

路郎——この句の程度の方が、川柳にはごつかに必要だと思ふ。次の句は誤植だよ。

「傳言板へ對つたところを叩かれる」が正しい。

川柳塔から

存在を無視して上座へ通る足

丹 路

路郎——實感だらう。(笑聲)

閑生——足に見てゐる處が面白いですれ、

路郎——しかも「足」で無視されてゐる方の

氣持が出来る。

閑生——無視してゐる方も出てゐますけれど「足」で成巧がなかつたら駄目、失敗しやうい句だと思ひます。

路郎——近頃の丹路君の句はよくなつたれ
丹路——遊びの氣分である時によく作れて一寸考へ込むと句が出ないんで苦しんでゐるんですが。

路郎——例へて云へば、輕業師の曲藝なんか演ずる方ではさう堅くならず、巧くやるのに、觀てゐる方では手に汗を握つてゐる。その輕業師の様に觀客の前で平然と曲藝を演

風水害御見舞

先般關西地方を中心として襲來致候颶風並に高潮の被害は未曾有の廣範圍に亘り且つ慘酷を極め候に就ては川柳家各位にも相當御被害を蒙られし事と拜察致し茲に御安泰を祈りつゝ謹んで誌上を以て御見舞申上候

川柳家各位 川柳雜誌社

謝風水害御見舞

先般近畿地方に稀有の颶風並に高潮襲來候際は早速御鄭重なる御見舞を忝ふし御厚情難有御禮申上候 本社同人並に社關係

じて、觀るものをして手に汗を握らすに至る迄は、中々一通りの苦勞ではない。絶えず考へ絶えず思ひを凝らしてゐる必要がある。さうしておけば他日いかにも樂さうにひよつこりとして生れて實を結ぶものだ。だから遊びだとは云へぬ。苦しんだから必ずしも巧い句が出来るとは云へぬが常に苦しまぬものに巧い句は出来ぬ。之は僕がよく云ふ境遇上大きな衝動を受けた時に、反つて句が出来ない父を亡くした、妻を亡くしたその當座はそれが句にならない。君が苦しまずにひよつこり出来たと思ふのは考へたもの、推積だ。

閑生——のからもつと考へる時期に入りませう（笑聲）
艸樂——喜多春秋さんの句はいゝですれ。
路郎——近頃はうまくなつた 此處で言ふのは何うかと思ふが、一般について云へば近來前書の句が多い。而も前書が生きてゐないのが多い。前書を入れて發表したい希望がある場合でも、一應前書を棄て、その句が優れてゐるか、ゐないかを考へて欲しいと思ふ。もう時間がないらしいので、これ位で擱きませう。（於閑生居、丹路筆記）

の人々中被害甚大なりし者次の通りに有之候處別段死傷等無之目下夫々跡片付或は避難致居り其他の者の被害は輕微に止まり候條御安意被下度候右乍略儀誌上を以つて厚く御禮申上候

英賀夫（浸水）	三	尺	雅幽	五	尺
夢裡	四	尺	白峰	五	尺
小柳子	四	尺	亂	五	尺
春光	四	尺	亂	五	尺
與三郎	四	尺	亂	五	尺
鮎美	三	尺	池澤樂居	襲	來
夕鐘	六	尺	業谷幸二郎	襲	來

川柳雜誌社

全國川柳家各位

主幹 麻生路郎
外同人 一同



猫々莊瑣談

正岡 蓉

禁酒曲

永ねんの大酒——それがこの一、二年めつきりからだにい
ちわるく崇つて暴酒になつた、亂酒になつた。

このごろは兩手と左の足がいふことをきかず、未だ、この
ゲンコーの字も（と云つても讀者諸君には活字だからわかつ
て頂ける由もないが）まるでさゝくれたベンでかきちらした
子供のやうな字體である。

——で、友だちが妻のすゝめで、頃日國手の診斷を経たら
この酒毒では、あと三年もたぬと云ふ。

で、自分は、これを機に、さつぱりと未練なく酒盃を棄て
た——文字通りとこしへに！

20代には、我が醉態を、大利根の月明、しとゞ血を吐いた
平手造酒に擬へたりしてロマンチックに酔つたものだが、い
や、その20代がつひ、おとゞしまでのことなのだが……。

もとゞ丈夫さうで、芯が弱く、検査前ころ25までは生き
ないと屢々云はれてゐた自分だから、どこか、缺點だらけの

からだなのであらう。30になると、がつくり、からだへこた
へて來た。

それが31のけふの夏——わづかの酒に、おはづかしい話だ
が、いくたび、崖から滑り落ちたらう、新市内の草原では泥
ぼつけになつて恥も慮外もなく熟睡したことだらう。おぼえ
ないうちに血みどろとなり、市井の屯所へ晝のひなか、あが
つてゐたことすらある……。

そこへ、こんどの「死」の宣告だ。

もう、いまの自分には、死を睹してまで盃にふれたくはな
くなつた。それも節酒できるとか、上述の醜態なき大酒なら
まだしもだが！

それよりも第一未だ、ロクな仕ごとをしてゐない自分はた
らわぬ乍ら何事か佳きごとがしたいし、同時にこれ以上う
ちのものにも嘆きをみせ度くない。

……即ち自分は盃を、對面の五郎が三寶にも似て、發矢と
大地に打ち碎いた所以である。

あゝ、さるにても微塵となつた、盃よ——。

翼が生えて九天へぞ飛んだ酒麴の群よ！

「武玉川研究」に

——「川柳雜誌」の「武玉川研究」を、「番傘」の「柳樽拾遺」とともに、毎號、おもしろく、有益に愛讀させて頂いてゐるが8月號ので、

淺草も上野もなりて郭公

の「なりて」は「鳴りて」ではなからうかと愚考される。

乃ち「花の雲鐘は上野か淺草か」の春がすぎて、青葉若葉

「郭公」の夏となつたと云ふ意味ではあるまいか。

それから「三疋ではねれば馬も詠あり」は、子供のじぶん

ちやちな色刷の繪草紙に、こんな童謡があつたものだ。

うたの順序はわすれたが、曰く

「狎わん、猫にやん、ちう、金魚に放し、龜、立石に石燈籠

お馬が三匹ひんくく」云々——。

「三匹ではねらば一の馬は、さらば、「ひんくく」と江戸

の少年たちを娛しました、そのお馬ではなからうか。

——以上二句、あへて先輩みなさまへの非禮をも省みず、

ちよつと、一と筆させていたゞいた次第だ。更に御指教を得

たいと思ふ。

天 民 先 生

——先輩松崎天民翁が逝いた。

自分は臨終の前夜、極めて意識明瞭な翁を牛込の女子醫專

附屬病院に見舞つた。

甲賀三郎、加能作次郎、村松梢風、松本泰諸先輩がゐて、

川開きが雨で流れた七月の夜は青いやうにしづかであつた。

「どうも偉いですよ、松崎さんはさつきも浪花節をうなりま

したよ」

などと云つてゐられた。

數多い先輩のなかで活字で、我が偏狹の作品をたゞへて下

すつたのは、村松梢風、松崎天民、國枝史郎諸先生ぐらゐで

ある。

禮讃萬へん、口から口でされるよりも、一行でも活字では

めて下すつた人々を、自分は終生徳とする。——なぜなら、

いまも云ふとほり、自分の作は偏つて咲いた、例へば、きつ

ねぼたんの花びらだからだ。

さてこの故に、自分は天民先生を極めて徳とし同時に、そ

の死を悼むや凡そ一と方でない。

——所で、ぼくの筐底には、ことし三月十九日附消印で、

最後の翁からのハガキがあるで、その一節をこゝへとりあへ

ず寫してみる。

このハガキに故人の署名の失念されてあることも、いまは

一沫の哀しさだ。

「在院六十四日間、

小康、やつと二十日に退院いたし候、中略、貧乏で病弱な小

生よりも貧乏で丈夫な大兄、(中略)大兄、大いに御努力願上候、十八日夕」

要は、これ丈けなのであるが、ありやうは貧乏で病弱な小

生よりも貧乏で丈夫な大兄」と一々克明に貧乏が兩方にかいて

であるところ、いかにも翁一流のユーモアがかんじられ、愉

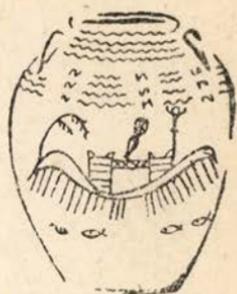
しいではないか。

がそのほくも、今や「貧乏」ではあるが斷じて昔日の「健康」

ではない。

——いま晩夏の朝の机にして、仄かにこゝろをかすめゆく

哀しさは、或は、そこに胚胎するものかも知らぬ。(終)



川柳塔

路 郎 選

朝 田 新 水

死ぬる不幸を他人にたとへ
戀の足もと目高が走り
何様か知らねど拜む小商人
親の職嫌ふも親が貧乏し
失職の孕める妻と沈み居る
白粉の無駄はなかりき十八九
寝る時間までも他人に儲けられ
蠅叩く父より先に蠅を追ひ
金借つて来たのに故郷の出迎へて
名も知れぬ男となつた夜を想ひ

西 田 艸 樂

とぼけてもまさか處女とは誰か見る
傲岸な鼻へ屈服してやらす
ぜんざいのとろりと甘し秋彼岸
妻の眼に遊ぶ計畫のみに見え
魂を置き忘れたる厚化粧
あれも夢これも夢かと老ひてゆき
さりながら夢は小さい自己と知る
愛の巢を訪へば仲よく晝寝なり
生活に女の髪が長すぎで
屈たくもなく日稼の夜のビール

生 田 翠 夢

阿 部 閑 生

日本品これだけ働きや安からう
萩の枝の感動し易い露を持ち
玄關を辭し痒ゆかつたとこを搔き
うち明けて心もとなき箸をとり
論議から抜けて茄子の水をやり
よそ目した間に月見草一つ咲き

病院で別れマーカス、シヨードで會ひ
秋もはやバツタ頭のうへを跳ぶ

橋本 緑 雨

山中温泉 (八月十日)

再婚の旅に涼しい風があり

高野山 (八月二十日)

高野山襟を合して坐るなり

植木鉢蛙が飛んだ騒ぎなり

簾越しにみる老眼鏡の面白し

岩崎 柳 路

ベニヤ板昨夜の客が訛に來る

○ 西村 明珠

ハンカチだそれ鼻紙だ式の朝

子があつて子のある役をスターする

體溫計手元に置かせ用に出し

瓦斯タンク凹むと教へ立ちどまり

惚れ薬ですと胃散をのんで置き

腰にしたタオルは吞氣そうに見え

夕涼みこゝは平和な月の下

大ジヨッキ人もなげなる氣をつゞけ

一輪車止まつたところで笑ふなり

風邪引いて夏はそれでも風を入れ
涙だけ悲しきを見せ都會の譜
墨すつて義理づくめなる町に住み
酒のめるから聞かれもす病上り

渡邊 曉 童

家、家の形となりて寢靜まり

洗面器あとがつかへる面白さ

おくさんといつたがすでにおそかつた

電氣會社灯を消すといふ術があり

女工もう女工としてのいたにつき

屋根の瓦のすつてくる夢

めしを食ふところを名人見せぬなり

お盆から大きなシャツをさせられる

後藤 青 兒

愛人の吹いた煙を吸ふ上布

大阪は住みよい所露地もあり

子の話半に降りる驛に着き

彼の山の上にもあるか所有權

老車掌切符仲々切りに來す

農村を救へと桑が風にゆれ

會社員罵る吾も會社員

自轉車の背中並んだ堺筋

吉田水車

海水着海の女王は濡れずゐるもの聞けば宿の女中も来たばかりノイチツブタイム植木も枯れてます退屈の一つぱ、マ、考へる朝顔の中で母親返事をし洋装にましろき肌のおしみなく會ふ日また彼女のすきなジョウゼツト

喜多春秋

笑つてもくづれぬ笑顔學者の娘花隈のおいど落した坐りやう美は胴を巻く一とすぢの紅い紐寝ころんで机の足に親しみぬ鏡無事蚊帳の吊手をうつしてゐ親しめば甘く見たなと思はれる風脚にかゝつて光る紙寂し

大鶴喜由

買う方の愛想のよさに恐れ入り喧嘩するにも興奮してくれず利は利を生んで拂ひ得もせず十七のまだものたらぬ線に惚れ

仲の悪い彼が輸血を申出るその無智を十六時間使ひぬき

悼没食子令弟

石曾根民郎

初秋をせかれる如く逝きたまふ壁ににじむ涙忘れて小商人校了をおしいたゞいた夜は疾風風は秋街を洗ひに來てもろたゴム足袋に音なし居酒屋は黠り雨もよい母もうたゝねごゝろなり行商に蜻蛉ひとつも飛んでやれ

水谷鮎美

子を抱けば南瓜の花が眞盛り子を抱いて救はれてゐる心の燈いちゞくの日向に枝は川のうへ金に氣をとられてゐればそれでよし妓とふたり愁眉は朝の露に似て蓮の葉のあまりに多き佛道生活へくわえたばこの獨りかな

國澤春水

雑談のうち金策断られこの暑氣よあんなお方の氣が狂ひ

物干はいとも素直にひるがへり
芒の穂戀は相對的でなし
行摺れに俺より高き女學生
寄附金のことで扇子が動いてる

梶谷 巷 二

深爪を切つてその戀秋となり
静けさは孔雀の前に二三人
こき使ひられて侮られても居る
筒抜けの空で大きく腹を立て
二十一朝に夕に息づまり

市場 没 食 子

内職の方は女房の名義にし
衰運へ妾の方が又産めり
挨拶に出るのに女將塗りもせず
貰ひ子と言ふのが知れる恐しさ
郵便屋が素通りをした淋しさよ

眞田 幸 捐

明珠氏に

金儲けし過ぎて友の水枕
冷房装置田舎の友を連れて来る
参考に東京の嘘も聞き
英雄に似た友達が見込まれる

學校の移轉へ古い椅子ばかり
北川あや美

戀の中つぎ不足税まで持つて呉れ

口びるの淋しい秋の夜をひとり

失戀へ我名をかへんなど思ひ

戀を遮ぎる親切な良

じんあいを除けて山河のうれしゆうて

みつる君の近況

男前女の敷におじけつき

西 い わ を

路次に住み植木に興味があるばかり

眞剣な顔で朝鮮語を話し

盲人の始終頭を掻き續け

愛想のつきた夫に病みつかれ

平井 與 三 郎

母親が離縁話に強う出る

刀根山の新館ちやなかつた愚寵さん

洗濯に出すツボンから五十銭

眼鏡かけた女給の言葉信じたし

平井 春 光

金貸して飯も食はして朝立たせ

氣の多い性と見破る詰將棋

惚れた相手が風呂屋のお嬢さん
就職が前の會社の筋向ひ

阿波盆踊

海越えておどり見にゆく阿呆の群

石丸晴朗

子があると聞いてチツプを置いてやり
子の前でこんな淋しいことはよそ
朗な朝よ子供の齒が二本
庖丁とどうせ夜話の品にされ

植山九天

八月十四日神戸槍繰走 (二包)

山の呼吸俺の呼吸神戸かすむなり
航空塔夕焼こやけ山を降り
編物に子のまりがとぶいゝ日和

日野華水

子を抱いて煙草は妻に渡しとき
自殺者が多いに寄附をたのまれる
女ばかりの街のよな夜が来て

毛利九波

去る者は追はず秋空かくも澄む
生活に疲れてならぬ鬚を剃り

犠牲とは戀と友情とを捨てるのか

荒井英賀夫

生れつきとは親にも恥をかゝす氣か
世渡りはまづ朝夕のおじぎから
あれだけを云ふにどもりのながいこと

廣江天痴人

兵營へなんと静かな月だねえ
無花果の雫となつて朝霧消えた
山麓に住ひ短歌の趣味があり

尼緑之助

そうですか町も涼しい夏でした
夏去る日目高の列の濃濁さ
茶を入れる間も虚偽がのさばつて

奥野禿山

悠々と鳶舞ふ下で汽船を待ち
背景にさても忙しい雲の様
憂鬱を慰めるやう動く雲

宮岡白峰

労働歌流れる江戸の段梯子
亦行くよ来るよ老眼鏡淋し
近況を案じた妻の便箋よ

明石 柳次

子を抱いて一錢のものの買ひに行く
釘を打つ顔に拾屋覺えられ
腹下しくづれる雲に目をつむり

竹内 機見女

白紙を流れてゆくは秋の風
業物にロイド眼鏡が映りけり
虫のよに唆けば會はれるかも知れず

中島 鐵洲

子を抱けば足にさはりし足の冷
退職の男羽織に壓しがきゝ
をかしくもくさめに虫の啼き止みて

首藤 竹楓

腕二本もてあましてる應接間
神聖であるべき戀に金が要り
近藤 勇

追へばにげる戀を求めて夏の宵
流れ行く妓に天の川長し

大西 八歩

その不幸きつちり坐り聞いてやり
意志弱き男から知る秋の風

京都清瀧にて

東谷 聞路

蟬聞いてゐて清瀧に足をつけ
手摺から見てゐる掃除宿の朝

町田 承春

鳴きしきる蟬々父を呼びに来る
誘惑へフト月給を考へる

野口雨情氏と語る

人格を笑顔に見せる氏の笑顔

三嶋 美笑

長男がハルピンなんてい所に住み
大工え世間話もよいかんな
働いてもうけて拂いますと言ひ

丘 遊舟

千圓を持つて死んだ一錢をもつて生きてゐる
情熱を奪ひ行く如秋の風

關本 雅幽

心身病む

生きる命は瀬戸物庭へ叩きつけ
江戸みつける

窮すれば通づる支那語もちあわせ

秋窓漫筆

山本丹路

九月號の近作柳樽の句を拾讀みしてゐるうちに、こんな句にぶつかりました。

代襟にうたて淋しうなつて来た

あきらめににてるのろけにさみだるゝ

魂にしみて篠笛 牙ゆるるなり

松江の雛千代と言ふ人の句です。最後の句には「桃太郎姐さんの篠笛を聞く」と前置があります。句主はあきらかに所謂お座敷を職場とする女性であらうと存じます。そして非常に氣持よく頂けました。話は別でございますが最近 花柳吟壽山調が出版してよりあちこちの川柳誌にばつ／＼ 花柳界を背景とする川柳を拜見します。實を申しますと、この間まで花柳吟なる奴は川柳の邪道だと、いゝえ決して、んから悪い、川柳を冒瀆するものだとか言ふのでなく、たゞ川柳が一般大衆から誤解されてゐる、その誤解をいつそう深からしめる一端にもなるんぢやないか知らと、まあかう考へるたまでですが、先日道頓堀散策の途上 明文堂に寄つて、何かの柳誌を立讀みしてゐた時、

酒で死ぬやうにも二度の袂言はれ

句がちがつてゐるかも知れませんが、句主もどなたでしたか忘れたのですが、妙にこの句が頭にこびりついて、歸りの南海電車に乗つてゐる、家に歸りついて、寢床の中までも、思ひ出されて仕様がなかつた次第です。それ以來と云ふもの、花柳吟

などとおろそかに讀過しないで、出来るだけ丁寧な一句一句を味はふ様にして居るのでございます。

結局花柳吟は、これを味はう者の立場から申しますれば、川柳に對する心のそなへ、心がまへの相違に依つて、もつともやさしいか、もつともむつかしいか、このどちらかの部類に極端に分れるのではありませんまいか。

吉井勇氏の酒の歌など、魂の苦惱が深刻に描かれて、路郎先生

君見給えほうれん草が伸びてゐるの句とおな、心構えで、素直に味はふ者の心へ、藝術的な感動を興へるのであります。と申しまして、短歌と川柳を同列に論じやうとするのでありませぬし、また、花柳吟なぞ今日の川柳からオ・ットして、純粹詩觀の上に川柳を立脚せしめねばならぬなどと、だいそれたことを毛頭言はふとしてゐるのではございませぬ。只こゝに花柳吟の一句をあげたとき、「君見給へ」の句に對した心構えを一旦ばら／＼にほぐして、あらためて安易な氣分で味はふねば面白が出ない——とかう云ふ觀賞の仕方に、どこか自分の心に矛盾を感じてゐるまでございませぬ。花柳吟の分らぬ不粹な奴と思召してせうが、分らぬことはありませぬ。

水府氏の佳唱

賣られたは三味線に手の届く頃

素材は大變悲慘なものでありますが、たくみな技巧によりまして、反つて情味豊かな句になつてゐます。けれどどこかによい意味のあそびが見えます。よそよそしさが感じられます。こんなことを感じる私は川柳味を解しぬ、川柳家としての天性的

粒々集

御影 長崎 柳 秀

干鳥賊の姿幼稚園雨を行き
虫干に妻長唄を口すさび
人心地つく浴衣着に母の糊
居すまひをつくろう妻に秋の風
瘦せたさへ女煙草を吸ひなれる
咽喉の奥寫す鏡のあほうづら
事勿れ主義を守ればつけあがり
父程に醫業振わぬ博士なり
松竹でこんなな遊ぶ人を知り
青春はものゝはづみを辨まえず

鎌倉 富士野 鞍馬

雑誌社はもう紙代に行詰り
黄昏の線路を工夫歸るなり
切れ話ひとの話であつてよし
鳥屋といひかしわ屋といふむつかしさ
年頃の膝の厚さを苦勞がり
商賣の序に善光寺へ詣り

な素質に缺けてゐるのでありませうか。

ひるがへつて頭書の句

代襟にうたて淋しゆうなつて来た

になりますと、純な句主の生活感情が句面に漂ふて居ります。斯様な處に、主観とか客観とかのむつかしい問題が生れるのでありませう。

何かの本で、農村の美しい風景よりその農村に貧と闘ふ小作人の血みどろの姿を主題にした畫の方に、藝術としての眞の價値を置きたい、と云ふ意味のことを讀みまして、まことに同感に堪えなかつたことであります。併しこれも小作人自身が自分の姿を描いた繪の前に立つたら、或は、眼をひそめるかも知れません。彼等にはそんな姿に見飽いて、美しい風景畫でものんびり見て楽しみたいからです。

私達に致しましたも、終日神経を疲れさして家に廻りついたとき、むつかしい川柳よりは、やさしい肩のこらない、なんとなくしみじみする川柳を求めたくなります。と申して享樂的な川柳も困りものすし、無暗に淋しがつたり、自分の影におびえたり、する句はかなひませぬ。

矢張り、人間に即した、生活に即した、どこかに人間性の眞實を求めやうとしてゐる句に走りたくありません。

先刻あそびと申しましたが、あそびは決していけないとは思いませんし、川柳もあそびだと存じます。けれどまだこのあそび樂しむ境地にまは行けさうにありません。ともすれば娛しむ、或は弄ぶ自分を展々發見するからであります。所詮、眞實に對するあそびは樂しみであり、虚に對するあそびは弄びであるからでありませう。こんな處に、川柳家として、まだ魂を磨かねばならない必然が潜んでゐるやしないかと存じます。

君安んぜよ火は火を櫛かず

閑生

兄弟を語る

弟にして先輩

平井春光

早く父をうしなつた私等兄弟は、よき母を恵まれながらも、どこか積極的なものに缺け、殊に弟は線の細い性質なので、向後の道程が心配です。

しかし川柳に關する限り、彼は私の私の先輩として、よく指導し、よく作句熱を續け、随時警拔な議論を吐くのでこの點頼しく思はぬでもありません。

近時彼は女給生活を深く掴むチャンスを得、したがつて生れる句も女給をよんだものが多いことは喜ぶべ

さかどうか、見貴を迷はせてゐます彼の女給の句のうち

三時四時女給の妻の歸り來す
よつほどにむしるつもり家呼び
女給するつもり別れるつもり



眞寫は井平三郎君

などは、實感の句として共鳴するのですが、ほんとうに好きな句はと云へば、やはり次の句を擧げるに躊躇しません。

恵まれて母の努力を氣付かざり

鳥打帽一つて

平井與三郎

十四年程前の寒い二月の夕べ。今、息をひきとつた叔父の枕邊に親戚が遺言狀の前に黙りこくつてゐた生前特別に愛されてゐた兄も勿論母の膝元に長まつてゐる。

數十分して母は突然口を切つた。「この遺言狀には（兄を指して）この子に財産を全部譲ると書かれてありますが弟には？ それに女の子供もあることですし、私はやはり弟の意志に背くかも知れませんが、この家の財産はこの子に戴き兼ねます」とツツパリ斷つた。

當時兄もその意見には母と同意だつたと未だに語つてゐる。親戚もその母の言葉には只感するばかりで頷くより仕方なかつた。翌年祖父の死に會つた（私等六人兄弟は父に早く死なれた）兄は早速弟等の爲に



寫眞は平井春光君

斷然意を決して學校をサヨナラして實社會へ鳥打帽子一つで飛込んで行つた。

叔母はさる堺の醫師へ嫁びき女の子は私等の妹として近く泉尾女學校

兄弟を語る

を出て上の學校へ進級する準備をしてゐる。幸福であることは叔母と共に云ふまでもない。左に兄の句を愛情は足袋になりないなどと言ふ意地と云ふものに命をおとしけ小心をキリン臉の邊に見せ

僕の先輩

橋本言也

彼弟が小學校の頃「寒空に氷が賣れる流行風」なんて狂句様のものを作つて先生に見せたところ、これは面白いといつて褒めてくれたさうです。無論その頃の彼として川柳や狂句に就て何等の知識も無かつたでせうし、又關心も持つてゐなかつたでせうが、斯んなふうになんぞにすら纏め得た事を無性に喜んだに違

ひありません。彼が後年川柳を作る様になつた事を思ふと、そんな頃から川柳人になる素質が無意識の中にあつたのかも知れません。

彼は川柳人としては僕よりも先輩であります。若し彼が居なかつたら僕は今日なほ川柳に何の關心をも持たなかつたらうと思ひます。御多分に洩れず僕も當時川柳を文字の漫畫位にたかをくくつてゐました。其内彼の創つた川柳に段々注意を惹く様になり、日頃の僕の川柳觀の大に誤つてゐる事に氣付いてきました。彼は川柳の價値を議論でなく句で實際を示してくれたのです。

それ以來彼に伴れられて句會へも出席し、雑誌や新聞の柳壇へ投句を

兄弟を語る

試る様になり益々川柳味なるもの、測り知れない深みと廣さのある事に興味を覚えてきました。斯んなわけで彼は今日僕を川柳人にしてくれた良きパイロットであります。今彼の句を左に

頼み事胡座になるも心やり

言也である

橋本今日史

ズボラの私が新聞や雑誌を読みちらして寝轉んでみると、どうも氣になると見えて自分で仕末をする言也である。私が昨年の暮猩紅熱で入院をしたが退院の其の日迄日に一度は缺かさず見舞つて呉れた。これも言也である。

○ 昨年ごろから煙草は少々初めたが酒は全々駄目、酒の事で電話でもあれば必ず急用を作る言也である。

川柳以外に俳句、情詩、和歌、これ



（寫眞は平岩司郎君）

等も作らすれば形にはする言也である。

○ 皆さんが街で右肩を上げて少々下向に歩るいてゐる五尺四五寸の男に

會はれたら、それは言也である。

舍弟司郎

田中款乃

○ 若葉の中からもの言はが出て來たばか戀に似てるが大分會はないこんな句を作る舍弟司郎はどうやら川柳とかはやなぎの區別はつくらしい。

○ 然し乃公のかはやなぎと川柳が同じものであると云ふ説はまだエトクがゆかぬらしい。

○ 司郎は父、母、叔父母、兄、姉、從兄弟と十數名の川柳黨を持つ我家の系圖ではピリケツであるが有名

(?)なのはトツバナである。

京都人であり乍ら大阪の雑誌社へ籍を置くとは怪しからんと京の柳人にせめられるのには司郎ほと／＼困つとる様です。彼方たつれば、こちらがたゞすで、とう／＼切腹したが死に切れず只今京大病院に入院加療中(實は盲腸炎)！九・八・一記――

蛇を飼ふ

平岩司郎

僕の兄サンは田中欸乃サン。

兄サンは蒐集家。漫画の本からマツチ、新聞切抜きから、蝶々まで。

兄サンは蛇がお好き。二人で蛇を飼つて氣狂ひにされてた事もあります。



(寫眞は田中欸乃君)

兄サンはお人好し。僕は叱られた事も撲られた事ありませんが、戀をするとはハラ／＼してられるらしいです。

兄サンの川柳華やかなりし頃の句。踊らすも踊るもたゞの女性にて人形の誰かに似たが浮ばない。

當年取つて三十七歳

田中欸乃氏からの通信に(前略)――

私の家では私が川柳を輸入しまして、父花咲を始め、姉土筆丘女、弟相界、妹あやめ、それに司郎等、親族友人三十名ばかり相寄り、ま、やかな會を五年程前から作り、毎月謄寫版刷にて川柳を楽しんで居ました。(後略)とありました一寸御披露まで、(編輯局)

兄弟を語る

雜筆春秋

武玉川研究

落穂 〓 其二

綿谷摩耶火

【初篇ノ二】

三五四——醫者の口から洩れる隠れ家

此の句は、佛寶僧（珍鳥）に關する有

名なる説話を詠んだ句である。もとは板

倉裁判記事にあるが——今、その書手許

になし、依つて閑田耕筆、卷三によつて

摘録する。佛寶僧といふ鳥は畿内にも

特に珍稀とされ、纒かに高野山、比叡山

松尾山の三所に限ると云はれて居るが、

近古京都の著名なる醫者某が夜中に迎へられて見知らぬ地に連行され、山害に伴

はれて主人らしき男の金瘡を治療した。

醫者は家に歸されて後、官に訴へて其の

賊徒ならんことを告げたが、其の地をハ

ツキリ告げる事が出来ず、たゞ一つ珍ら

しく思つたのは佛法僧の聲を聞いた事で

であると申告する。時の名判官板倉侯が、

新六帖に「松の尾の峰靜かなる曙に仰ぎ

て聞は佛法僧の聲」の歌あるを基礎に、

その賊徒の隠家を松尾なりと判定し、直

ちに賊の首領を捕へ得た。——此の話柄

は甚だ有名なもので、西鶴の本朝櫻隠比

事、四ノ九の如きも此の話をもとにして

書いたものである。

五六六——追分へ来て下戸を眷る

會玉篇大全などに「眷」の字をカヘリ

ミルと訓んでゐるから、こゝでは「ミカ

ヘル」即ち見返ると訓んで差支へはない

追分の茶屋の前で立ち止つて、上戸が、

下戸の友へ遠慮がちに「一杯やりたいの

だが……」と言はんばかりに振返つた、との意である。

五八九——廿五の曉またぬ五間口

諺に「二十五の曉まで伸び」と云ふ

即ち二十五は男として一人前に成る確然

たる區劃的年齡であるとの意が含まつて

ゐる。類句に——

一寸先をしらぬ廿五(木の葉がき)

の句がある。原句意は、その一人前に成

り切る以前に、家屋敷を手離さねばなら

ない状態を云ふ。即ち手におへぬ放蕩息

子である。五間口は、所謂五間間口で、

家屋としては大の都である。近世江戸に

於ては小戸は九尺二間すなはち間口一間

半奥行二間を以て常法としてゐる。五間

口は、かゝる裏店ではなく、相等以上に

大きい住家だ。浮世床、初篇の下に

「角屋敷竟には野暮の手へ渡り、と川柳

點にあるが、うそはねえ。」と云ふ、かゝる放蕩息子は多かつた事であらう。

五九六——あぐらの側に上下の恥

正装の道具と、按坐といふ自堕落を對比して、その並列の餘りにソグハザル感情をば表現した句。上下の傍でアグラをかゝれては、上下を恥かしめる所以だといふ程の意。

灸をかゝれる琴爪の恥(年ごもり)

など同じ表現の句。用法に非ざるものを用ひれば何だか後めたい氣持がする、それを簡単に「恥」と表現したのである。

具體的な一例をあげると——毛筆といふものは日本文字を書くものだが、英語を書いて書けないといふ譯ではない。然し毛筆で英語を書くとするに内心妙なソグハナイ氣持、むしろ毛筆に對して相濟まぬといふやうな漠たる後メタサを感じるこれを「毛筆の恥」と表現すれば、表現

の來由は一應うなづかれる。

六二六——曾我の泪を目黒でも泣

虎が雨(五月二十八日)は、丁度目黒不動の縁日にあたる。即ち虎が涙雨が降れば、目黒でも縁日商人が泣くとの意である。比翼塚を引き合ひに出すには及ばない。

大磯でよいに江戸まで泪雨(獨あるき)

は表現類型句である。(九年八月三十一日夜稿)

光・粒

|| 路郎兄へ ||

久流美

川柳雜誌は益々充實して來たやうである、九月號の表紙凝つて思案に成功してゐる。君の句、「有閑の表札もなく乳の函」は近來の傑作、私ならば下五、「ソ

ツブ函」としたかも知れない。不朽洞はやはり不朽洞であらう、加賀から漸く二

三の投句は憾みに思ふが、隣家照坊主、いつの間にやら貴誌の愛讀者になつたのは嬉しい。蛭子氏の健達筆、柳壇の寶としてむしろ崇教の念沸く、「兄弟を語る

」は新しい試み、吾等兄弟なきものは「兄弟の如き友人を語る」でも草しやう？

艸樂君の

◆こゝらあたり未亡人が住むと覺えたり却々ラクに咏んでゐる、川柳の平坦さはこの呼吸で、よいのだ、私はプロ川柳とか、イカの冠つた新興川柳といふものが嫌ひでね。

長崎柳秀君の

◆萬年ペン試しに書くも彼女の名これも、捨てがたい佳句だ。

私はけふ——九月四日——

◆軟かい鉛筆君の名を書いたの句を作る、非暗合、思想の共鳴かも知れない。(九月四日夜)

五、七、五欄に一矢

毛利九波

近頃聲望すべき記事は「番傘誌」九月號五、七、五欄に於ける川柳雜誌社同人云々の一文である。

川柳に關する或はそれ以外の同社同人のかなり趣味的に興味を有するものとして讀んでゐたものであるが、この一文は一體何を云はんとするのか、目的も内容も無き、川柳雜誌同人に對する中傷？又は反感とでもいふか誠に諒解に苦しむ無價値なものである。

各派系統雜誌同人の夫々の見地、立場は異にこそすれ、川柳を過去の奇智、諧謔、皮肉を弄したる十七音字なるものと認めたる大衆に對して、現代の川柳とは如何なるものであるかを再認識せしむるべく不斷の努力を傾注する人達ではあるまいか。柳歴の如何を問はず其の派の如何を問はず等しく川柳の向上をはかる集團ではないのか。傳統の保守に依つての

み川柳を再認識せしめやうとし、その意圖に於て他派を排撃するのみならば吾人又何をか云はんやである。

何れにしる彼の一文は大方の失笑を買ふ以外に、五、七、五欄を冒瀆し斯の如き言辭を弄する作家の價値を低下せしむる外の何物でもない。斯かるものを掲載する編輯子の態度を疑ふものである。

○

秋の感觸をしみじみ感じる昨日今日、嬉しい文章を發見した。大毎紙上の路郎先生の秋と酒である。

ビール、ビール秋が來たとて秋が來たとて――

私はその詩情のあふ餘韻にすつかり嬉しくなつて唾をぐくんとのみこんだ。

敢て感傷家を以て任じて居ない私と信じてゐるが、それとも酒を好む所以でもあらふか。路郎先生の微醉を帯びた姿、家庭のよきお父さんでありよき夫でもある先生は私達川柳家に對してもよき先生であつた。

私は先生と親しく酒を酌交したことは

ないが微醉の先生に接したことがある。川柳上ではあるが私的な會合であつた。先生は十年の知己の様に親しい言葉と態度で、まるで先生の子供に等しい私を遇して下さつた。(敢て私一人の經驗のみ信じない)

川柳の道に入つて未だ日淺く知己無かりし私はどんなに感激したことであるかしみん／＼同人に加へられた幸を味つた。川柳の講演に評論に批評に卓越せる識見と、火の如き熱情を有せられる先生の内面の暖かい滋味と思つた。

父も子も一列空の護りに出

燈下管制そこへ大きな月が出た

九月不朽洞句稿より

防空演習の折には人一倍活躍せられた先生と知る。人間的に川柳的に其處に完成された先生の姿をまぎ／＼と追ふことが出来る。

「川柳雜誌」の價値云々する人達のまるで傳統の保守に縛られた、ひからびた鮭のような川柳家だと思ふと同時に、よき師を得たる私達「川柳雜誌」の同人を更に幸福なものと思つたのである。

(九・九・八)



柳川二十日會

川柳二十日會にはさなだでも
出席出来ます、毎月二十日の
午後から夜にかけて不朽洞一
南海橋玉出願西三丁キンケ喫
茶店にて路那志除を中心とし
る會です、會費の定めはあり
ません。

▼こんごは第三回目の廿日會である。この會の記事は出席者の持寄になつてゐるのに、今度は誰一人記事を寄越さない。一夜明けたらアノ颱風だ。二十日の記事ごころではない。尤な話だししかし廿日會として皆目記事がないのは淋しい。そこで私がホンの少しばかりお茶を濁すことにした。

▼こんなことになるんだつたらしつかり耳の掃除をして置けばよかつたが、僕はフム／＼云つてゐればいゝのだと思つて、なるべく樂に聞いてゐたのでサテ書くとなるとケン／＼場面が展開して來ない。誠に殺生な目に合はず颱風ではある。

▼與三郎クンが自轉車を飛ばし大正區から來て、史呂が來ん、史呂が來んと嘆いてゐたやう

風水害をお見舞申上げます

キンケ喫茶室 一同

だ。先月は史呂が待ち呆けだつた。仲のよい二人はシーソーゲームをやつてゐるやうなものだ。僕の句に「許嫁たがひちがひに風邪をひき」といふのがあるか知つてゐるかしら。これで晝の部の出席者はしまいだ。聞かされ役の僕のひまなことを申分がない。あとは皆夜の部にやつて來た。史呂クンが來た。いつも晝の部と夜の部の通し切符で頑張

る紳樂クンが悠々せまらぬ態度で出て來た。禿山クンが來る。▼今日はアアをひきさうだと噂をしてゐるところへ墨陀亡なきあとの重役に就任した丹路クンが這入つて來た。そこへ同じく重役の亂耽クンがみな出勤してゐるといふやうな顔を一寸見せただばかりで何處かへ消えてしまふ。夕鐘クンが來ると坐が陽氣になる。阿波踊の寫真を××に

見せたらみんな非常に若く見たと連も段違ひの年下に云つては嬉しがらせる。尤もみんな光頭クラブの御連中だからうれしがるのも無理はない。そこへ上手な聞き役の夢裡クンが顔を出すと時間も相當なものになつた。東京の玄六クンを引つぱつて行きますといふ翠夢クンが引張らすに來たころには、先客はもうみんな引上げてゐた。

カナメ食堂の提灯

▼電話がかゝつて來る筈ですがと翠夢クン麥酒一本をチビ／＼吸うて待つてゐたが途々姿が見えぬので、あきらめて尻をあげた。なんだか面白い話が續出したことは事實だが、この記事を書く頃にはもうチツとも覺えてゐないのも事實だ。ソレではあまり有益な話ではなかつたのかしら。まあ、萬歳へ行つたと同じ調子だ。大たい二十日會へ來ない人に、あんな面白い話を聞かせる必要はないとうまく逃げておく。(不朽洞主人)

(キンケのおつさん)



柳翁忌

九月十一日夜 於道頓堀俱樂部

清涼、虫の聲、秋を奏でる一夜、われ等の始祖柳翁忌句會を營んだ。時恰も當日午前五時、柳壇の大先輩、井上劍花坊氏が鎌倉において急逝せられたことを夕刊で知つた。參會者一同の、かんげせには皆一抹の哀愁が漂つてゐた。

路郎主幹は「物故川柳家を語る」と題し故木村晃卓君の思ひ出を語られる筈であつたが、劍師の訃に接し、更めてその追憶を語り、別項筆記参照）厚く弔意をのべられた。

尙當日米阪の「川柳三人旅」一啞三味、陣居、花戀坊三氏が臨まれ、啞三味氏は挨拶を、他の二氏は、東都張りの披露を示され、溪花坊氏は先般參詣せられた、淺草、龍寶寺のお話を述べられた。遠來の英賀夫氏（四條を加へ參會者八十四名、盛會であつた。

散會後「いし堂」に於て前記三氏の歡迎宴を開き、之亦盛會を告げた。（山雨樓記）（出席者）路郎先生、絲雨、梅子、禿山、新水、丹州、史呂、蝶の助、素月、まさな、

九天、久米雄、木履、喜山、某人、天國、鶴峰、奈良、山雨樓、英賀夫、萬よし、あや美、正夫、青兒、夢裡、豆秋、幸捐、末廣草、冬籠、紳樂、雞牛子、萬樂、節子、與三郎、雀踊子、白柳子、いわを、十字路、小松園、友帆、九波、陣居、花戀坊、啞三味、機見女、銀波、柱風、柳甫、勇、清美、かほる、亂耽、華水、おさむ、立名、溪花坊、子鬼、双平、彩泡、水炭、遊歩、卜居、鮎美、白菊、觀月ひろし、丹路、車魚、柳次、四路平、月麻呂、申仙、白葉、閑路、沐天、耕之介、文久、水咲、夕鐘、秋無草、青踏、里十九、悟郎（以上八十四名）

席題「聲色」 花戀坊選

聲色も父に似てると喜ばれ
 聲色へうれしくなつた酒を注ぎ
 聲色をまた澤正を聞き飽きる
 聲色を使へば課長見直され
 聲色もいれて小使愚痴を言ひ
 色街へ聲帯模寫の細い肩
 聲色屋地聲でチヨイとぼやくなり
 聲色屋連絡船に乗り合せ
 聲色に雨のきそいな氣配の夜
 支配人聲色が出來唄が出來
 七色聲色屋屋根の向ふの猫を聞き
 (同)聲色で故人末世のあけつらひ
 (同)ルパンカの聲色寶塚をまれ
 (同)聲色に外人夫婦驚かす
 (同)聲色屋戀人だつた人の聲
 (同)左團次の妻詞がうまい江戸好
 (同)聲色へ廓は別な色に暮れ
 (同)聲色三度目の聲色へ妻立つたま
 (同)聲色へちと呑み足のぞを見
 (同)騒ぐ子へババの聲色もうき
 (同)十銭の聲色お富だけをやり
 (同)いぢらしい事に聲色覺へたり
 (地)聲色屋ほんとの聲で子を叱り
 (天)聲色屋あしたは雨だなと思ひ
 (軸)聲色は路次、路次の間に消え

秋無草
 觀月
 新水
 久米雄
 素月
 耕之介
 彩泡
 史呂
 青踏
 華水
 四路平
 陣居
 萬よし
 鮎美
 ひろし
 竹波
 雀踊子
 久米雄
 同
 梅子
 夕鐘
 啞三味
 白柳子
 英賀夫
 花戀坊
 居選

聲色屋滿洲國へ行くと言ふ
 レコードがいたみ聲色出來か、り
 上役の案内、うまい鶏の聲
 聲色の器用語學にほしいなり
 聲色のごないでおすと叩かれる
 聲色のほごよく更けた闇の色
 某人

聲色屋滿洲國へ行くと言ふ
 レコードがいたみ聲色出來か、り
 上役の案内、うまい鶏の聲
 聲色の器用語學にほしいなり
 聲色のごないでおすと叩かれる
 聲色のほごよく更けた闇の色
 某人

聲かけ行人の眼をそばたせ
 初年兵軍服姿見せたがり
 好い姿追越して見る戎橋
 思案する姿となつて秋の蠅

三人旅におくる
 陣
 居選

亂耽
 萬樂
 まさな
 白柳子

姿見へ寫してからの愚痴になり
 寫真屋にまかす姿の常着なり
 カラス目に乞食自分の姿見たり
 聲かけ似てる姿が崩れたり
 金になるポーズ裸體で風邪をひき
 姿見に立つ母少し反つて見る
 しみじみと見たはキリン見むか
 大陸をかきたとはいキリン見むか
 饒舌にあきたと膝をくみなほし
 和ませる 姿國防婦人會
 瓜彈は 誰にも遠慮ない姿
 湯上りも 一人娘と言ふ姿
 泣く時も 女は姿考へて
 『七福肩うすいみじく母になる姿
 (同)軍帽をかむる姿は日本の子
 (同)後から彼女と知れる空の色
 (同)姿見へ眉は悲しものにする
 (同)シロウインド君の姿は満足だ
 (同)汗をふく女の姿 惜くなし
 (同)姿見にかくせぬ乳を色ごりて
 『玉葱とと言ふ姿になつた飾窓
 (同)愛人へ若い姿のまゝで生窓
 (同)亡き母の姿放翁の橋を越へ
 (同)思出にある母いも、磔かけ
 (同)思ひ出す母の姿は 障がけ
 (人)働きに出る、妹のいゝ姿
 (人)心みらるゝ姿となりぬ
 (天)「北西の風晴」明日の姿なる
 (軸)松並木母の姿が馳けてゆき
 席題「精進」 東
 精進を忘れる友に出會ふたり
 大會の迫る 精進首を巻き
 親しさに 精進物で馳走をし
 茶白山これは豆腐と飲へられ
 精進を祈るテープが切れてゆく

小松園 蝶之助 子鹿 與三郎 豆之助 蝶之助 九彩泡 亂耽平 双平 耕之介 萬山 夕鐘 機見女 天國 天國 柳次 天國 白柳子 英賀夫 華水 素天 九人 某三味 啞三味 點美里 月廣居 魚選 萬助 啞三味 青同踏

君は君だけの 精進さと別れ
 正体の知れぬものあり 普茶料理
 四十九日異母兄と言ふ酒の酔ひ
 精進の日向に秋の道白るし
 精進の影夜の壁へまゝなるし
 ふりかへり見る精進の夢のやう
 土瓶から呑んで和尙よく肥り
 藝所に生きアパットをまた追はれ
 ひつそと精進をたてて子が一人
 精進かしてストライキ山を降り
 お精進畫の蚊が出る 茶白山
 精進を守る次男へ嫁を取り
 近頃は精進してのあごを撫で
 精進と別に 外出雨に念ひ
 精進の 箸先代の話出る
 (人)精進の器を讀めて先づ座り
 (地)父の娘に精進の日の雨となり
 (天)精進の膳こみ入つた話する
 (軸)蟲眼鏡萬句合せに眉をよせ
 席題「興奮」 溪花坊選

白柳子 小松園 九路美 點路平 同路平 同路平 梅子 友帆 豆秋樓 山雨樓 幸捐 塞路草 聞路草 耕之介 天國魚 東魚 亂居 氷炭 夢裡 青兒 山雨樓 啞三味 某平 双平 節子 雀蹄子 萬躑躅 亂耽樓 山雨樓

興奮を海は笑つてくれただけ
 興奮に辭表の端が見えてある
 興奮の乙女よ 秋の青なるぞ
 興奮をしづめる蚊帳が響き揺れ
 興奮に明白は別れる身なりけり
 興奮に階段降りる 早いこと
 (人)興奮の部屋を北風通りぬけ
 (地)忘れじとする興奮へ月眞の水
 (天)興奮にわたかたおりのなき影ば
 (軸)興奮のあとはおりのなき影ば
 兼題「明月」 新
 明月へ見合は明日になつてある
 生活の苦勞と別に 観月會
 名月をうつつす 長屋の水溜り
 明月は騒ぎも止んで虫の聲
 明月へたよりない鍵かけて出る
 思出は明月の夜ふられた夜
 明月へ下駄のしめりをおぼへたり
 明月の手摺に白い指がふれ
 明月に金氣の多い茶をすべり
 明月に呑み友達が一人喧へし
 裏切りの娘へ 明月唯白し
 不足ない顔で 明月拜見に出
 階級の鳴く犬があり星があり
 階級の丸窓に 明月照り互る
 明月は上窓に 浮き虫の聲
 明月に 浮きたる君のプロファイル
 憤慨のふと明月に氣がゆるみ
 (住)醉眼で見る明月もあわれなり
 (同)明月の下に 女の嘘多き
 (同)明月は桶の水から見上げられ
 (同)明月へ 啞の瞳は泣けそう
 (軸)仲秋の懐淋し月を觀る

青牛踏 四月磨 白柳子 雞牛子 青牛子 文久 點美里 溪花坊 水選 山雨樓 耕之介 冬籠 木履 九天 新市街 文久 夢月 友帆 機見女 月廣居 夢廣居 秋無草 天國 雀蹄子 新水

自他の話

麻生路郎

大西畫伯油繪小品展

既報されてゐた本社社員大西長三郎畫伯の油繪小品展が阪急の六階で九月二十四日から三十日迄の一週間開催された。同君としてははじめての個展、何とか成功させたいものと自分も及ばずなが、先輩知己柳友諸君に晝夜兼行でお願いの葉書を書いた。ところが御承知の二十一日に近畿稀有の颯風、かてゝ加えて水害騒ぎすべの催しものは、一トたまりもなく消し飛んでしまつた。が、阪急の畫展ばかりは中止も出来ぬ。阪急から新聞廣告を遠慮されてしまつた。しかし乗りかかつた船である水と油は昔から仲がよくない。洒落れてもゐられず、必死の勢ひで蓋を明けた。ところが同君の徳と諸賢の應援で豫想外の成績をおさめることが出来たので、まづ「コレナラと胸を撫でた。同君も満足してくれた。特にお買上げ下さつた方々、御清鑑下さつた方々に感謝する。

風と水に流れた會

▼沖野岩三郎友だち會主催の角座觀劇が二十二日たつた棧敷に幹事二人觀客二人といふみじめさであつたとあとから觀客の一人から聞かされた。おまけに顔がさして芝居を觀てゐられなかつたとのこと、自分も出掛ける約束をしてゐたが、公私多忙になつたのと各種の會合が洪水のやうに一時に押し潰されて行つたので、この會合も多分駄目だらうと早合點して問合はせもしなかつたが、原作者沖野氏にはまことに濟まないことをしたと思つてゐる。

▼東京の川柳三人旅を泊めた大阪パンシオン主催の屋上觀月宴が二十二、二十三、二十四の三日間開催されることになつたのが中止されたので、參會して下さることになつてゐた方の御好意を深謝する。

▼キング喫茶室のレコード・コンサートも二十一、二十二日に開催する筈がお流れ

柳壇プリズム

★

▼川柳三人旅は、無理なスケジュールを強行して來たにも拘らず、思つたより元氣な顔で大阪驛頭へあらはれた。時間をまちがへて私は、逆に一行に出迎へられた形になつて、劈頭大きなエラーをしかしてしまつた。彼等はあちら、こちらの歡待にすつかり頭になつてマルクス三人兄弟を聯想さすに充分な姿で、關西柳壇を漫步して歸つた。

歸京すれば直ちに着手するといふ「關西柳壇見聞記」彼等のリットル報告書こそ一日も早く見たいものである。

▼また九月の静岡大會へ行けなかつた連中、改めて同地を訪問する計劃があるとき、東西交驛會をふり出してやるのもいゝことである。

▼虫の音すたく頃、向島俳諧亭の柳談會も今月あたり催されるのぢやないかと思惟する。「柳談會」は東京柳壇にとつて、決して悪い存在ぢやないと思ふが――。

▼おもひで吟社の九月十三日の選者は、○丸、壽山、皮肉といへば皮肉である。

の狀態に つた。御期待下さつた方々の御寛恕を乞ふ。

▼毎月私が出席することになつてゐる二十五日の阪大川柳會も、二十二日の住友仲銅鋼管の尼崎句會もお流れになつた。

風水害の對策協議會

二十七日の夜に同人茶話會が新築のカナメ食堂で開催される筈になつてゐたが、同人中多數の風水害罹災者を出した。で直ちに、この夜の茶話會を對策協議會に變更した。出席者は綠雨、山雨樓、華水、竹楓、艸樂、豆秋、里十九、水車、機見女、青兒、開路、丹路、九波、春光、夕鐘、新水と私の十七名。見聞した哀話裡に協議に移つたが、社 罹災者側に屬するので社としては一般から罹災者に對する見舞金を公募しないで、社關係の大々（殆んど被害のない者にはないので輕微な罹災者も含む）からお見舞金を募つて社關係の人々特に同人中被害の甚大であつた人々へ贈ることとした。即ち内輪で慰問することに一決した。尤も他社有志からのお見舞は拜受し、これを社關係の人々からの饋金中へ繰入れ、それ等の處分に就ては至急を要するために下記委員に一任を乞ふことにした。委員長（藤生路郎）委員（橋本綠雨、福田山雨樓、朝田新水、西田艸樂、須崎豆秋、永田里十九）お見舞金は一口金五拾錢以上とすること、締切は十月五日、本社主催風水害慰問句會當夜までとし取纏めは永田委員とした。尙協議當夜までに被害の判明した人々は左記十一名である

堺市出島町三五八	村 松夢	浸水	四尺
大正區三軒家西二ノ六	松下小柳子	同	五尺
同 大正通六ノ九二	平井春光	同	四尺
同	平井與三郎	同	四尺
西淀川大和田町六二六	水谷鮎美	同	三尺
港區西田中町四ノ四	姬田夕鐘	同	六尺
大正區鶴町三ノ一〇	關本雅幽	同	五尺
同 三ノ八八	宮岡白峯	同	五尺
兵庫縣魚崎町五九八ノ二	住田亂耽	高波襲來のため船にて避難	
同 川西七三二ノ三九	柴谷宰二郎	高波襲來	
大阪府梟北郡高師濱	池澤樂居	同	

▼「同舟會」が解散の準備をしてゐるとか、
ゐないとかの ニュースが入る。少なくとも
私ばかりのことなかと祈つてゐる。

▼「ほうすき」二號は十日頃發行の由、創刊
號より更に凝つたものであらうと待望する。

同人某氏の「よりによると」「花柳界」にと
ても評判がいいとの事、但し之は川柳界の
誤植では決してない。

▼きやり展覽會へ宮尾しげを「百人一句」
の原圖出品する。尙ほ同氏の近業に「小嘶研
究三」、出版。り。（以上亂耽）

▼四國柳壇の隆盛を壽ぐと共に、今秋より、
詩の國愛媛を代表する 柳誌刊行の計畫を、
前田五健、酒井大樓、石丸春峰、渡邊曉童
等の諸氏によつて企てらるゝと聞く。何と
いつても秋は一番詩にふさはしい。

▼尼 綠之助氏は、野球といつば今夏
は松江支部の強 チームと一戦交へたかつた
が同支部からの遠征がなく、あたり腕を撫
しつゝ、好機の無かりしが残念、尙ほ小生な
んか投手盤を踏んで健闘するところを、本
社あたりの人々に一度見て貰いたい位です。
（役略）

▼京都へ行かれた、明石 柳次氏は、商賣の
爲め新聞紙さへるくに、讀めぬ多忙さである
さうな。何時も句會に出席した、大阪に居た
頃が懐しくて……其内句會が二十日會へ出
席したいと文。（以上禿山）



占ひ

麻生葭乃選

灰色の氣を占ひに引づられ 史郎
 占ひの解けない姉の針坊主 令風
 氣掛りな事を占ひから迷ひ尙喜固黨
 待、人を占ふ妓等の負け惜しみ トミヤ
 縁結びヒヨイと結べて淋しがり 笑巴亭
 占つてみてそれからの足の幅 呂香
 十八の夢を易者はむごくあて 節子
 占ひにふとトリツクを考へる 末廣艸
 サクラの手もつたいら 易者見、卓山
 トランプで占ふ悪もある若さ 彩泡
 茶柱へ淡い望をかけて出る 彌生
 占ひを信するほどに弱くなり 菊路
 かりそめの占ひ迄も運悪く 葉光
 あきら、居ながら御籤引く弱さ 青柿
 ビルの灯の高さ占ひ荷をしまひ 曉童
 占ひを全く信じ切つて眠り いさを
 トランプへあの娘の心さく若さ 三男坊

占へば過去の事だけ當てゝある 青兒
 神易の算木が運を押へてゐる 春秋
 むつつりと坐せば占ひあてゝゝ 緑水
 占ひへあゝ人生のはかなさよ 小松
 年廻り凶その次の星も讀み 秃山
 大凶へ相思易者を貶すなり 白英
 占ひの先生様が露地に住み 小樓
 占ひてかくも淋しくなるものか 雛千代
 占ひが當つて財布軽くなり 柳夢
 占ひ料やすく良い事づくめなり 夜食子
 占ひへ風呂の歸りの顔で立ち たけを
 占ひの望み少さい妓の色氣 新市街
 占ひにはかない胸を持つ女給 同
 占ひになれきつてゐる女給の手 いね三
 占ひをトランプだけに打明けて 百文
 占ひの方角あまり廣過ぎる 美奈都
 占ひに又も決心にぶるなり 一羊

川柳家名鑑志 (二)

一 戸籍調四百各に達して一

係・山雨樓

年齢を調査して見ると

生年	人員	生年	人員	生年	人員
(明治)	人員	(明治)	人員	(明治)	人員
二年	1	二年	5	二年	36年
三年	2	三年	8	三年	37年
四年	1	四年	8	四年	38年
五年	2	五年	16	五年	39年
六年	1	六年	12	六年	四〇年
七年	1	七年	16	七年	四一年
八年	3	八年	12	八年	四二年
九年	1	九年	11	九年	四三年
一〇年	1	一〇年	12	一〇年	四四年
一一年	1	一一年	16	一一年	四五年
一二年	2	一二年	15	一二年	四六年
一三年	2	一三年	17	一三年	四七年
一四年	2	一四年	19	一四年	四八年
一五年	3	一五年	17	一五年	四九年
一六年	4	一六年	14	一六年	大正二年
一七年	6	一七年	11	一七年	三年
一八年	5	一八年	14	一八年	四年
一九年	3	一九年	11	一十九年	不詳
二〇年	5	二〇年	28	二〇年	五年
		二一年	27	二一年	合計
		二二年	23	二二年	400名
		二三年	27	二三年	5名

希望もうなくて易者を振り向^すしとし
 一錢を入れたおみくじ吉と出る 琴月
 占なつた吉を信じて見たくなり 同
 占つてくれたあの君不慮で逝き 双亭
 占つて芳ばしからぬ唾をのみ 同
 目を閉ちて心を決^ま神髓^を引き 朝雨
 戀しきは占つてみる氣にもなり 雅星
 辻占は神を頼んだ指に割れ 義風子
 占ひをする妹の肩の線 史呂
 占ひは心のうさを又殖やし 久米雄
 諦めて引けばおみくじ吉と出る 紫陽
 殘^るのに易者ほとく困り果て いの助

綱引

先生の笛で綱引重くなり 青香
 綱引きの眞上に揺らぐ萬國旗 令風
 綱引きにあさつさり負けた顔^を喜固^轟
 綱引に大和魂こもるなり 節子
 綱引へ凍傷の手が痛むなり たけを
 綱引へ子供力のありつたけ 白英
 綱引へ見物席から聲を出し 緑水生
 綱引へ白よ赤よと父兄席 菊路
 綱引へ子供ゴム靴ぬいで來る 彩泡

橋本綠雨選

末吉のみくじに少し氣をなほし 世間音
 占ひは吉お汁粉をおごらされ 喜由
 占なふて見ればなかない片思ひ 天國
 なるにしかならぬ浮世を易に^ま 磐園
 やまがらに我が人生をついば^れ まさを
 運勢が思ひ當つた今日のこと 花太郎
 占ひに一とこ合はぬ過去があり 華坊
 病人に見せる御神籤ひき直し 紅
 家相等氣にして母の水枕 葉魚
 占ひを信じ時計のネジを巻き 春峰
 縁むすび藝者の技巧とも知らず 春帆
 天戀人に會へる處へ焼けて行き 白峯

綱引に先生腰をみてまはり 奈里
 綱引へ樂隊の要らぬ音を立て 久米雄
 綱引の異口同音になつて勝ち 喜由
 綱引へ父の申股紐が切れ 紅
 團結の力を示せ綱を引く 史呂
 勝負を別に綱引せろう唄 新市街
 綱引の負けそうな方聲をあげ いの助
 綱引に一人が笑つてどつと負け 美葉魚
 綱引の横に先生はなれない 曉童

働かねばならぬと思ふ。

同じ年廻りの者を若干摘記して見ると

(子)角戀坊、路郎、翠夢

(丑)銀波樓、周魚、幸男、奔郎

(寅)紋太、雨吉、幸捐

(卯)柳秀、三太郎、汀柳

(辰)春雨、水府、天邪鬼

(巳)久良伎、天民、正光、白柳子

(午)故劍花坊、(故)五葉、晒三味、東洋鬼

(未)○丸、盈光、綠之助

(申)花菱、愚佛、砂人

(酉)(故)卯木、松窓、雀郎、亂耽

(戌)力好、珍竹林、司郎

(亥)玉兔朗、宵果、有爲郎

作家の現住所を各府縣別に調べて見ると

大阪府 一六八 東京都府 五一

兵庫縣 四七 京都府 一七

石川縣 一七 島根縣 一四

滿洲 九 北海道 一八

長野縣 六 愛媛縣 五

神奈川縣 五 朝鮮 五

愛知縣 四 山口縣 四

福島縣 四 岡山縣 四

青森縣 三 長崎縣 三

大分縣、高知縣、香川縣、靜岡縣、滋

賀縣、鳥取縣、廣島縣、和歌山縣、山

梨縣(以上各二名宛)支那、福岡縣、奈

網引へ一年生といふ姿 小樓 浮腰となつて網引負け始め 蛙庵
 三人の力網引父が負け 彌生 網引の上で先生旗をふり 紫陽
 網引にもたれ込んでる細い腕 天國 網引へ第二國民氣を揃へ 青兒
 網引の皆な力んだ顔の色 雅龍 網引に夏瘦をした子もまじり いわを
 網引へべつたり坐る女學生 花太郎 網引へ來賓席はさわがしい 没食子
 網引のあとに午餐は豫定なり 柳夢 三回の勝負に綱がブツリ切れ 大露
 網引は勝つたつぼんの汚れやう 臯山 網引へかはりくんに一二三 柳夢
 網引へチヨツト力ぬいて見せ 三男坊 人 負けそうにならぬ綱引みやがみ 臯山
 網引に小さい組が勝つてゐる 世間音 地 網引の型で先生旗を振り 笑巴亭
 網引の大人の顔の眞剣さ 琴月 天 網引で何人か試される 喜由
 網引へ俺の力も入つてる 雅星 佳吟 網引へ一人轉べば皆ころび 菊路

風水害慰問川柳句會

日時 十月五日(金) 午後七時
 場所 道頓堀俱樂部 大阪市南區日本橋南詰東入南側 (兼勝南三丁目天並)
 兼題 名所川柳 「堺」 三句 麻生路郎選
 大阪の巻 「復興」 三句 庄萬よし選
 同 「災害を語る」 麻生路郎氏
 講演 三十一錢
 會費 三十一錢

追て席上で風水害被害川柳家の災害模様を報告致します。

良縣、三重縣、德島縣、埼玉縣、山形縣、千葉縣(以上各一名宛)
 合 計 四〇〇名

三府、二十八縣に亘つてゐる。勿論この府縣分布は戶籍調べ照會當時の現住所に依るものであるから、現在のものとは大分底底があらう。

尙昭和五年以降照會した分には出生地を答へて貰つたので、各出生府縣別に統計すると

大阪府	三四	東京府	二六
京都府	一五	兵庫縣	一三
岡山縣	八	鳥取縣	五
山口縣	五	長野縣	五
大分縣	五	石川縣	五
德島縣	五	愛知縣	五
神奈川縣	五	島根縣	四
滋賀縣	四	高知縣	四
岐阜縣	四	愛媛縣	四
青森縣	三		
富山縣、新潟縣、熊本縣、香川縣、福岡縣、靜岡縣、廣島縣(以上各二名宛)			
奈良縣、宮城縣、佐賀縣、福岡縣、群馬縣、秋田縣、和歌山縣、福井縣、埼玉縣、鹿兒島縣、茨城縣、福島縣、長崎縣、三重縣(以上各一名宛)			
合 計	一八七名		

殆んど各府縣から川柳家を生んでゐる。

阿波踊

☆ 観光吟行 ☆

◇八月二十五日午前十一時半、天保山から乗込んだものは里十九、夕鐘、新水、かほる、春光私の同人六名、一船乗後れて禿山が行つたが逢へぬじまひだつたのは残念であつた。◇午後五時小松島に着くと、徳島名物の風が揚つてゐた。大なるは六疊面、小なるは一疊面はある大小數十の風が、港の空高く風に唸りを立てたる様は偉観であつた。此の懐しい故郷の空を眺めた夕鐘、童心を呼び起して限りなく喜ぶ。風々々が迎へてくれる(夕鐘) 驛からほど遠からぬ永楽町、「花菱」夕鐘の姉さんの家にひと先づ落着く。浴衣を借り、湯に行くものもあり、かほる、私は座敷に残る。その間も表の往来はしきりに踊が流して来る。「お茶屋の気分はごこでもよいもんだんな」かほるさんが話しかける。(花びしの

二階が嬉し阿波踊(かほる) (阿波踊笑はれて法被着る(紳樂) 粋な處は主人衆が、鳥追姿に三味線、太鼓、鼓、横笛などの鳴物、その前を男、女、小供中には五十年前の娘さんまでが

本の踊としては急テンボの見本だ。(鼻筋のおしるい濃い阿波踊(かほる) (お國柄急なテンボで踊り抜き) (夕鐘) ◇藝者男衆、若者、町家の娘、踊らな損ぢやと来るは来るは、右から

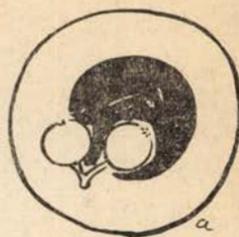


両手を胸のあたりへ差出して、足を交互に交叉しながら、ソーラ、ヨイヨイ〜と拍子をとつて踊りながら歩く。チヤレストーン位なテンボの早い、日

左から、まるで他所の奉祝踊そつくりだ。(徳島へ移つて住みたいかほるさん(里十九) ◇市役所前、その他二三ヶ所に踊查所があつて踊つて来る者に優

勝旗(そう呼んでゐる)が渡される。(かほるさん踊見る眼は常ならず(夕鐘) ◇十一時半に船が出る。支度を急いで驛へ来ると、なんと踊りは驛の構内まで没入して来てヤン〜ヤカ〜ソーラ、ヨイヨイ〜をやつてゐる。(戀人の踊る姿も闊となり(新水) 踊るだけ踊つて徳島更けて行き 里十九) 十二時へ踊り足りない阿波踊(かほる) ◇われ〜が知らぬ間に春光、どこかで踊つて優勝旗を貰つて来て、汽車に乗込んでゐる。達者なもんだ。(白粉と汗へ兩國橋更ける(春光) 發車まで驛で踊つてくたぶる(新水) 來年は一人で来やうと気が残り(紳樂) ◇何分その日歸るといふ旅の忙しさ、そこへ踊の騒々しさ汽車が出るのと忘物をした様な氣持だつた。隊長里十九の指揮よろしく一行十二分の觀覧をして、無疵で戻れた事芽出たし。但し、禿山の行動は保證出来ぬ。(紳樂記)

寫眞説明 前列向つて右より、新水、春光夕鐘、後列同、紳樂、里十九、かほる



古狸窟雜筆 (七)

梅木塵山

(七二) まを

密夫を、まをとこといひ、此れを略してまをといふも古き語なり。

「好色旅日記」卷四

宮めぐりの案内彌宜子細に、白きまんどいきて、烏帽子上髭かけし男を見れば去年の春迄あげやびたし太鼓の時右様何と久しや、これは源さま太夫さま、やあ命がおめにかゝり種、櫻屋の女房に眞空にひねられせんかたなく、此身のなり、云々。

(七三) 内鼠

商家などの主人に善く仕ふる手代を、白鼠と今もいへど、自宅にのみ引籠り居て世間を知らぬ息子を、昔は内鼠といへり「柳亭記」

内鼠は家におのみ籠り出て、世間知らずの人をいふ。此詞は白鼠より古く見えたり他我身のうへ(明曆三年刻山岡元隣著)三の卷「たのしき庄屋殿の一番子を一人

まうけられ、朝夕是をかしづかれけるにて、うちかぶりの程も過ぎはや十六七にもなりにける。されども此太郎、内鼠にてありしかば、庄屋是をなげき、云々。

(七四) きそん十七

元祿八年十二月六日、攝州西成郡下難波村の墓地にて、赤根屋半七と美濃屋さんと情死せる事は、淨瑠璃或は小説に作られて、世に誼傳する所なるが、其時の半七の遺書に「誠哉きそん十七とら薬師とて、天下に名を得し博學の如きさへ、云々」といふ文あり。此きそん十七とは、何の事をいへるにや、未考。

(七五) 木の花

世に木の花といふは、梅の花なりといへども、元來梅は支那より渡來せるものなれば、我邦に野生のもの無し。櫻は野生のもの有る而已ならず、遠き神代に於きて、木花開姫命といふ神名あれば、木の花の櫻の花なること勿論なり。然れども

古く梅花を木花といへる例無きにあらす「茅窓漫録」中之卷

古今集序注に、この花は梅の花をいふなるべし、と書きたるより、和歌者流今にいたるまで、木花は梅花と傳へ來れり。古今集序細注を、貫之の自序、自注と心得て千載以來の取違へなり。彼序細注は後人の加筆なる事、平維草が和學辯にもいひたれど、何れの世、何人の加筆なるや知れがたし。彼注者も、木花は必定梅花とも決しがたき故に、この花は梅の花をいふなるべしと書けり。必定梅花に決したらば、この花は梅花なりと書くべし云々。

「松陰隨筆」

松永貞徳は紅梅千句に、紅梅やかか銀公がから衣。とといふ發句があり。こは古今榮雅抄春上、

色よりも香こそあはれとおもほゆれたが袖ふれし宿の梅ぞも

といふ歌の註に、漢仙記云、銀袖匂移、木花古情留。といふ漢武帝の後銀公の袖の香、梅花にうつりて匂を留めたり、とある故事によるなり。

(七六) でんばう

劇場其外の興行物を、入場料を拂はずして観覧するを、俗にでんばうといふ。亦此れを油虫ともいひたるが如し。

「燕居雜話」

江戸の方言に、劇場へ無價にて入者をつんばうと云へり。是は淺草觀音の境内なる觀物を見むとするに、傳法院より來る者と云へば、價を取らず入れしより起れりとぞ。又一説に、浪花にでんばうと云所有り、この地無頼の徒多くして、劇場などを無價にて見るよりして云とも云る由。

〔飛鳥川〕
でん坊と云詞、昔は油虫といひたるなり

(七七) 牛追物

鎌倉時代の騎射の儀式に、牛追跡といふものあり。此れは野飼の牛を追ひて、騎射を試みるものなるが、後に犬追物の行はるゝに及びて、廢絶するものと云ふ。

〔東鑑〕
養和二年四月、於三金洗澤邊有牛追物

下河邊庄司等依_レ有_レ箭員各賜_レ物

(七八) 狸火

關東には、狐火といふもの有りて、江戸王子村の除夜の狐火は、著名のものなりしが、關西には、狸火といふもの有り。是等は狐狸の業にはあらで、燐火の燃ゆるものなる可し。「諸國里人談」卷之二(攝津國川邊郡東多田村のうなき暖に、狸火と云燐火あり。此火人の容をあらはせり、或時は牛を牽て火を携へ行さまをなせり。是を誠の人間と心得て、其火を乞てたばこを吞み、はなしなどして行に、尋常の人に替る事なし、かつて害をなす

事なく、雨夜には折々出るとぞ、世人是を狸火といへり。

(七八) 鱧撃と山椒

山椒といふものは、川魚の毒を解すとして昔は鱧を食ふ時、之を膳に添へて出たるもの也。

〔南畝秀言〕卷之一

世俗鱧に山椒をそへて食ふ事、_陸類本草云。食醫心鏡に、主_五痔瘡瘻殺_蟲方鱧鱧一頭治。如_レ食法切作_レ片。炙着椒鹽醬調和食とあり。

(七九) 古人の渾名

古人の渾名には、日本記の御局、待宵の侍従、物かはの藏人等の如き、名譽のもの有り。なるさの入道、名無しの大爲、鳴戸の中爲の如き、嘲弄の意を含むもの有り。古文書を涉獵したらむには、多くの面白き渾名を發見するならむ。

〔春浪浪語〕天變少將。無月宰相(高松公定)

〔體源抄〕卷卅五。犬目少將(藤原俊明)

〔おほうみのほし〕蝦大納言(久世通夏)

〔百人一首一夕話〕はだし馬助(藤原敦頼)

〔同〕相少納言。(藤原惟長)

〔保元物語〕第一。三町つぶての喜平次大夫。

〔同〕あきまかぞへの惡七別當。

〔榮花物語〕卷第八。仰の中納言。

〔鹽尻〕卷六十七。薄雲の中納言(源雅兼)

〔文德實錄〕第六。米糞上人。

〔甲子夜話〕卷一。黃昏の少將(松平定信)

〔同〕五月雨の侍。(從橫瀬貞臣)

〔同〕霞の侍従。(大久保忠貞)

〔春浪浪語〕。勝間田兵衛佐。(源顯仲)

〔隣女暗言〕。かねことの茂助(戸田茂睡)

〔平家物語〕卷第八。鼓判官(壹岐知康)

〔八〇〕 九年母

源順の(和名抄)に「橙。和名、安倍太知波奈。似_レ袖而小者也。」とあれど、あへたらば、なほ今いふ九年母の事にて、漢名々香橙ともいひ、乳柑ともいひ、昔田道間守の將來したる、非時香菓といふは是也とぞ。

〔傍廂〕前篇

九年母といへるは、垂仁天皇の御代に、田道間守といふ人を、常世の國に遣はされて、時じくのかぐのこのみとりよせ給ひしを、後世九年母といへる故は、御紀の九十年春二月庚子朔。天皇命_レ田道間守、遣_レ常世國、令_レ求_レ非時香菓。今いふ橘これなりとありて、九十九年云々明年春三月辛未朔壬午。田道間守至自_一常世國、別養物也。非時香菓云々とある九十年より九十九年の明年まで、十一年なるを、つかはされし年と、かへり來りし年とを略きて、中九年なれば、九年母とはいふなる可し。母とは、この菓を乳柑とへれば、母と號けしならん、云々。

女店員又かと思ふ客があり
 女店員にネクタイの柄委すなり
 女店員、家に病の父が居り
 シヨツプガール大阪辯がしまひ
 (人)女店員丹前の柄攪らされる
 (地)地下室のシヨツプガールは世帯死
 (天)女店員旨くとぼけてゐるの
 (軸)親切をもうまにうけぬ女店員
 (軸)女店員中の一反抱えたり

川柳今里句會 (大阪)

八月 没食子報 新市街

更生は臍のあたりで脈を打ち
 しつかりと懐爐は臍にあてがはれ
 雷鳴に臍を隠して物理學
 王手飛車かけて拭いてる臍の汗
 なりはびの臍とも言はずモデル
 觀光園仁王の臍も撮つて置き
 臍の糞を切られてからの浮き洗み
 出臍とも知らず解きた醫者の指

夜店 かほる選

冗談の筈に夜店の値がきまり
 はすかしい本を夜店でそつと買ひ
 買ふ方に値段聞いて居る夜店
 大将と呼ばれる夜店何か買ひ
 アセチリンラシブ(香具師い)男
 植木屋のところで夜店は引きかへし
 二等品ですと夜店は否定せず
 (軸)もう一度夜店はを出し

畫 寝 山 月選

招集に午睡の兵舎静まりて
 鍵かけてマダムの晝寝續くなり
 晝寝から醒めて嬉しい親の慈悲
 添乳した晝寝の妻に見る疲れ
 晝寝起された西瓜切らされる
 晝寝するお伽の國のハンモック
 能力を晝寝復活する時刻
 (軸)晝寝にも神經營は寝付かれず

川柳維誌社大地吟社例會 (鳥根)

九月九日夜 於尼緑之助居

湯治客村の言葉習つて來
 蜻蛉叱られた子に親生まれ
 臨月の妻を想ふ旅の宿
 湯の宿に二つ並べてタオル干し
 旅のスケッチにまづい句を添へる
 想像勝手にせよと旅だより

川柳維誌社伯耆句會 (鳥取)

兼題 欠 伸 三鴨美笑報

欠伸して甚合手ほしい秋の雨
 夜もふけて一時になりし待つ欠伸
 欠伸して朝寝の煙草吸ふてゐる
 面白くない話欠伸が續いて出
 欠伸していつしか夢にさそわれて
 大だんな欠伸してから寝てしまひ
 (佳)嚴然と欠伸書生は鼻でする
 (同)姉がして母が欠伸俺へ來る

兼題 客 銀月柳

兼題 客 美笑選

先客を後に廻してせいでます
 一ぶくを吸うて床屋客をよび
 氣安さの客に手傳頼むなり
 新盆に他家に嫁いた娘が來
 言ふだつて傳へて客はすぐ歸り
 (秀)知りたつて遠慮の過ぎる女客
 (同)客の前蛋が一匹飛び出して
 (軸)客への合手も出来る娘にな

川柳維誌社梅田句會 (大阪)

八月二十九日夜 於 美居

涼臺踊子遠くに歌を聞き
 覗く顔覗きかへして踊てる
 盆踊品のよいのが片目なり
 盆踊曲つた腰が上手なり
 農村はうんと踊つて景氣よく

川柳維誌社梅田句會 (大阪)

兼題 かつむり 於 美居

夕飯へ花火の音が聞ゆなり
 シャンパンをぬむ花火へは、えめ
 かつむりお金の蓄まるかたち
 夕涼み河原の花火とともに更け
 姑と嫁とみつけたかつむり
 人生の辛苦を語る顔の鰻
 童心におごるかされた蝸牛
 美しい戀かつむりへ銀の雨

兼題 静波 於 美居

兼題 静波 於 美居

流星のように火花は消へちまい
二階から戀人と見る 豆火花
(軸)占へば顔のほくろが難になり
出戻つて仕掛火花のなかにゐる
優しき。ひらに首をのびした蝸牛
苦勞した顔だ笑ひをくづさない
(軸)二十四の唇態を憂さをすて
夜の嘘鏡のなかの顔さびし
この顔がくゝとて悲観する 同 鮎美
顔のおしろいをおとさればならず
(軸)かたつむりきれいな虹がで、ぬは
(軸)かたつむり思案のく先を備へ
唇籠へおちつきのない若き日よ 同 同
(佳)昂奮をおぼゆる雨の唇籠よ 同 同

川柳雜誌社 大鐵局支部 畔柳社句會 (大阪)

九月十四日 於大鐵グラブ

初秋の風が暑さに苦しみ續けて來た 顔に
氣持よく富ると見る間に席題そのまゝの上
砂降りだ 雨を衝いて山雨樓氏を始め展望社
からの應援隊苦樂公、伸路、楚堂三氏の顔も
見える 念、するもの二十名川柳味を満喫する
に相應しい夜の集ひだつた (久米雄記)

席題 土砂降り 被講 互選

土砂降りへ馬力大きな音をたて 明 坊
阪急のネオン土砂降りに傘がなし 九 天
土砂降りを斜に受けて白い足 一 光
土砂降りへヘッドライトの早い 天 八
土砂降りへ線路工夫の灯が遙 伸 路
土砂降りを馬子氣持よくくゞり行き 水 客
土砂降りへ兎も角嘘をついて出る 苦樂公

土砂降りへ雑草といふ強き見せ
土砂降りへネオンサインが美しい
高架から見ると土砂降りの面白し
土砂降りがほしい水源池の目盛
人情のこゝまでといふ借用證
友情のこゝまでといふ借用證
貸借の精算未済押しつまり
貸借に村の總代呼んできて來る
棒引にすること伯母からととせ
貸借で法廷の床札ませる
貸借のこまかい義理を笑はれる
同窓の貸借と云ふ溝が出来
貸借になれて子供をつれて行き
(秀)天井の高き決算期の帳簿
(軸)貸し借も知らず子供ら仲がと

席題 借 某 人選
天 秋
久米雄
一 光
九 天
伸 路
明 坊
山雨樓
秀 太
水 客
某 人
天 選
木 履
明 坊
水 客
天 秋
久米雄
某 人
明 坊
水 客
山雨樓
苦樂公
某 人
山雨樓
路 選
一 光
某 人

背像畫六十歳のまゝ、である
似顔繪の笑つたとを書かさせる
背像を見つめて居れば不甲斐なき
背像かふと眼について眞顔なり
背像へ秋の陽さしがつらくなり
(佳)團樂の上に背像動五等
(同)背像へ濟まない埃はらふなり
(同)生活と別に背像畫のひかり
(同)背像の母の額が廣さ入り
(同)背像へカタコト母を泣き入る
(地)元旦の灯を反射して御尊影
(天)背像も瘦せ先生も瘦せてゐる
席題 盛り場 仲 路 選
盛り場へ盛出させぬ撒水車
盛り場にのつびきならぬ金を持ち

故郷の友連れて道頓堀の夜
盛り場を過ぎて氣付いた月の色
盛り場をなやめに抜けた太鼓持
(人)縁談のち、娘盛り場よけて去に
(地)盛り場は何かうれしい夜となり
(天)盛り場へ死ねない人がひびく
席題 航 海 苦樂公選
風少しメーンマストへ北斗星
猫去つて航海日誌無事でなし
一航海終へた汽笛の耳につき
航海へ水夫の眉は一文文字
朝やけへ領海を出る船の笛
津軍の弟から
(佳)青森へ入港リンゴの箱が來る
(同)縁談のままとまるまゝ、船に乗り
(人)波を氣に妻の便りを信じ切り
(地)こんごめの航海きの錢を借り
(天)祈りたい氣持太平洋の月
席題 乞 食 苦樂公選
米賣つて酒買つて來る乞食の子
乞食の子無くてはならぬ子供なり
堂々とした體格で乞食居る
内祝ひごこで聞いたか乞食來る
縁日に乞食同志の禮儀あり
物乞ひに馴れた女のよくしゃべり
乞食の娘生え際のない、黒い髪
(佳)乞食ふも馬力が曳いてみたなり
(同)乞食の子芝居の下の下駄と知り
(同)土塀のくづれに乞食居着く
(同)物凄いや乞食は向きを替へ
(同)元町の乞食英語でめぐる

楚 堂
きんじ
木 履
水 客
苦樂公
杏 林
水 客
山雨樓
一 光
山雨樓
某 人
九 天
喜 山
喜 山
喜 山
喜 山
明 坊
一 蜂
杏 林
水 客
某 人
楚 堂
山雨樓
九 天
山雨樓
某 人
同 同
同 同

(人) 少年野球へ乞食ちよつと立ち
(地) 寒月に乞食つまづき相に去ぬ
(天) 千日を越す乞食の子手ちなき

席題 乞食 伸

高架線乞食インテリめいてゐる

俄雨乞食の尻が軽いなり

この寒さ乞食は何處で寝るのやら

アーク燈乞食も冬の景になり

乞食へ女の香りがきつすぎ

盛り場を抜けて乞食休むなり

ビルヂング乞食を寝る場所があり

(人) 手を連れた乞食宿はまだ遠い

(地) 千を越す乞食ヨロヨロ捨て去に

(天) 乞食をかへる銅貨の音で立ち

席題 乞食 山雨樓選

寒天へ乞食の蓮軽いなり

本名も出さず乞食行きだほれ

此の間の乞食今日も焼場にゐ

乞食 案外澄んでる瞳

門にたつ乞食の眉の太いなり

ネオンの灯同じ乞食に今日も會ひ

早魃に乞食故郷を思ひ出し

大とんご乞食だまつてあつてる

ひとときの時雨にぬれて乞食ゐる

乞食へ目も呉れて居ずハイヒール

泣き聲の凄さ乞食の子へ師走

新型の五錢乞食の子に渡り

乞食のよも今日も晴れてゐる

乞食に地獄祭のむすびが出

乞食まだ人生感を持つてゐる

九天 某人

山雨樓 路選

某人

久米雄

きんじ

山雨樓

天秋

秀太

苦樂公

一峰

某人

同

光

天八

楚堂

天秋

水客

久米雄

九天

木履

伸路

苦樂公

某人

同

苦樂公

一峰

水客

(同) 幸か不幸か親子揃ふて乞食る

(同) 秋風へ乞食眞直ぐ立つてゐる

(同) 圓山を乞食が唄ひ相にゐる

(同) 乞食の影のながい國道

(人) 號外は乞食の前へ風を立て

(地) 秋空の高き乞食の太い足

(天) 盛り場の乞食流行歌をおほえ

兼題 途中下車 山雨樓選

途中下車訛ある妓に送られる

途中下車夫婦連れでもない二人

途中下車蛇の目の傘が重いなり

途中下車梵字の讀めぬ集印帖

途町の行燈が明い途中下車

途中下車須磨の濱邊で深呼吸

途中下車女房の里へバスがあり

(人) 途中下車だ。智識でさしや

(地) 途中下車瓦煎餅買っただけ

(天) 途中下車大和の判に急ぐ靴

(軸) 途中下車車夫に寄りつかれ

兼題 餘 山雨樓選

そんな時代もと伯父は五圓呉れ

保険屋へ餘裕のないをぶちまける

髭が出来餘裕が出来て親しめず

挨拶をすまして登車ベルを持ち

餘裕とは別に三人目が生れ

言ひ勝つて掛軸のゆがみを見付け

そんな餘裕がないと貯めてゐる

金策ができて基盤の持ち出され

伸路 某人

同

同

同

同

水客

某人

山雨樓選

伸路

明坊

某人

木履

久米雄

天秋

水客

秀太

木履

同

山雨樓

山雨樓選

苦樂公

天秋

久米雄

秀太

喜山

某人

杏林

水客

(軸) 餘裕なき暮し晚酌ゆるされる

兼題 箸 山雨樓選

空腹へ箸の動きを笑はれる

割箸の威勢よく子等汽車の旅

退院を明日に來る兒のよく育ち

父の箸取りに來る兒のよく育ち

母親に箸は拜んで仕舞はれる

一人だけ箸が動かぬ河豚の鍋

病上り自分の箸を重く持ち

素麵の手の延びるだけはさみあげ

女房も子供供の箸で喰べ馴れる

サンドイッチ箸を持ちさう気てまみ

(人) 今日からは無職ゆり箸を置き

(地) 割箸の辻占へ寄す箸のひたひ

(天) 夕焼へ一家裸の箸の音

(軸) 箸持てば夕への膳が静まつて

兼題 吸取紙 山雨樓選

吸取紙ハガキに訛り見付たり

小切手の千圓残る吸取紙

(人) 吸取紙算盤のせて晝に立ち

(地) 從順に生きるあきらめ吸取紙

(天) 全權の署名さかさに吸取紙

川柳 今治 會 (今治)

維誌社 今治 會 (今治)

八月十四日 渡邊曉童報

兼題 自轉車 曉童選

自轉車が悲鳴をあげる暮しです

商賣と別に自轉車走らせる

山雨樓 秀太

編輯の窓 山雨樓

▼果然好評を博した「川柳作家兄弟を語る」は柳壇の花形揃ひである。愛讀を祈る。

▼月評は閑生氏邸を煩はした。今回は路郎主幹、閑生氏が参加された上に、久し振りの亂耽君も見えたので必讀の文字だ。

▼丹路君は「秋窓漫筆」と題して感想を記す。筆硯益々健やかである。

▼本號は原稿輻輳のため「柳壇畫報」「川柳パイロット欄」及「川柳戸籍調」を休載することにしました。

▼路郎主幹は公私特に多忙の中を斯く多数に執筆された熱讀を祈る次第である。

▼高須啞三味氏の「川柳のもつ限界」は紙面の都合で一回に掲載し切れなかつたことを、同氏並に讀者諸兄にお詫びする。

同氏は川柳評論家として定評のある方、次號御期待を乞ふ。

▼正岡啓氏の「猫々莊瑣談」は好箇の隨筆、しんみり讀んで頂けると思ふ。

▼九月九日廣島縣竹原支部の創立句會に紳樂、翠夢兩氏と共に出席して、御歡待を蒙つたことを厚く御禮申します。

▼竹原町は頼山陽の郷國、史蹟に富み、山陽幼時の家宅もその儘依存してある。山河草木自ら維新の懐古を物語る感があり。吾々は深く感動させられた。この由緒深き竹原に投ぜられた一石から更に波及して、山陽道に川柳の芽が繁茂する日の速かならんことを祈るものである。

▼路郎先生は九月六日の大阪毎日新聞學藝欄へ「秋と酒」と題して隨筆を寄せられた。

一駒一節ごを讀んでも先生の血が流れてゐる文章であつた。

▼朝鮮「京城四温吟社」の津田麗月冠氏は災害直役來阪せられ、本社に對し見舞を述べられ鄭重なる見舞金を惠贈された。茲に厚く感謝の意を表します。

▼来る十一月上旬松山市に於て川柳大會が開催され、路郎先生は本社の同人二、三名を伴つて

之れに臨まれるさうだ。噂をそのまゝ、

▼路郎先生の御宅でも輕微の被害があつたけれども、御子達を始め皆様が無事でゐられたと聞いた時にはほつとした。令息令嬢の通學してゐられる玉出第三小學校では校舍倒壊の爲め數名の兒童が壓死され多數の負傷者を出したのだから。

▼恰度あの朝は霞乃奥様の第六感から、登校を見合はせられたところへ颯風が襲來したのださうだ。「家内はいつも新聞なんかろくに讀まないのだが、警報だけは見ておつたのか知ら」とは路郎先生のお話。

▼今度の風水害で吟社としての被害は「大阪媛柳川柳會」が一番甚だしかつたやうだ。雞牛子氏の御宅は浸水七尺に及んだとのことである。氏からの書信の一節に「當方瞬間にベシヤンコです。柳書全部流失残念々々。三味線草十月號の原稿はポケットへ素早く入れたので大丈夫」とある。誠にお氣の毒に堪えない。

Nishicho MEMO

▲九月廿一日の近畿地方の風水害に際して皆様から多数の御見舞状を頂き有難く御禮申し上げてます。幸に同人諸君には負傷がなかつたやうです。大区内西淀川區、此花區、港區、大正區及堺、尼ヶ崎

方面の川柳家には水害が甚しいので同情に堪えません。▼本社竹原支部の創立句會に本社から山雨樓、艸樂、翠夢の三君が出席、講演に懇親宴等なか／＼盛會だつたそうです。別編會報参照なす。▼月二會が復活されたので九月八日夜第一回の句會に路那先生が出席。今後路那先生が月一回出席されることになりました。幹事は今村吉朗君で今後の活躍を祈ります。▼當百類題句集上下二冊が川柳叢書刊行會(京都市今小路七本松西入)から發行されました(領價二冊送料共四十六錢)。▼里十九君經營のカナメ喫茶店が新築されて九月十八日から開業されました。▼福田鶴峰君は九月十四日高野山へ參詣されました。

▼阿部佐保蘭君は八月七日から八月中、九十九里濱へ邊遊されました。東京の曳き手が目立つ地曳綱(佐保蘭)。▼小西無鬼君が後備の召集で篠山歩兵聯隊へ入隊されました。「叱られて家の妻子を思ひ出し」(無鬼)。▼加藤文醇君は九月十三日熱海から浦賀へ旅行されました。▼神戸支部の幹事西村明珠君は病氣のため首藤竹楓君に交替されました。同君の活躍を祈ります。▼篠川支部が創立されて百回日の會が来るので、十一月三日記念句會を開催されるそうです。▼萬よし君は十八年間渡世された「上かんや」を廢業されて、今回關西旅行協會萬よしプレーカイトを創業されました。十一月上旬第一回大社參詣の團體を募集されてゐます。▼荒井英賀夫君(愛媛)は商用で九月十一日來阪、本社の柳翁忌に出席されました。▼吉田水車君は本職が忙しく、本社の會にも出られぬと云つて此の頃地方へ出張ばかりしてゐられるそうです。▼増位汀柳君は大坂朝報社社會部へ入社された。同新聞に川柳欄を設けられました。▼川柳三人旅の三君が十一日日本社事務所へ亂耽君の案内で來訪

されましたが、時間の都合で親しく話が出来ませんでした。▼番傘川柳社で句會創立廿五年の記念句會を九月十三日夜催されました。▼媛柳川柳會では柳翁忌を九月十五日夜營しました。▼本社柳翁忌に川人旅の啞三味陣居、花戀坊の三君が出席されたので、散會後三君の歓迎宴をい堂で催しました。出席者は路那先生、東魚、半疊、雞牛子、山雨樓、かほる、亂耽、艸樂、萬よし、新水、丹路、梅子、九波、銀波、與三郎、豆秋、夕鐘、禿山の諸君と私で十二時すぎ迄歡談し、萬歳三唱裡に散會致しました。▼丸岡白葉君は「丸岡寫眞」出張撮影、復寫引伸専門を開業され向井不路子さんは結婚されてから一時川柳を止めてゐられたが、この頃復活されて左記轉地録を祈ります。一日も早く全快を祈ります。大阪府大津町字二田助松驛裏)。▼平若司郎君は盲腸炎で入院されておました。全快されて九月十一日退院されました。▼市場浸食子君の令弟が九月五日入院中死去されました。哀悼意を表します。▼同人北川あや美君は家事の都

合で同人を退かれることになりまして、一日も早く復活を祈る。▼武田甲子太郎君(東京)は九月五日永眠されました。哀悼の意を表します。▼富士野鞍馬君の令嬢エミさん(歳)が九月廿六日鎌倉病院で永眠されました。哀悼の意を表します。▼新澤素泉君の嚴父が九月十一日永眠されました。哀悼の意を表します。▼寄せるを頂いた、本會社竹原支部創立句會(九月九日)若葉會(九月二日)今治支部(八月廿五日)高知支部(八月廿三日)▼私是一家三ヶで參詣して歸へりました。▼今回の災害に私は幸ひ無事でしたので、廿五日、廿七日の兩日に亘つて柳友諸君を御見舞ひに廻りました。

轉居と改號

▼川上三太郎氏は東京市王子區上十條町八五〇へ、○榊岡詩朗君は堺市遠里小野町三二三へ、▼尾崎勇一君は東京市蒲田區御園町六三八へ、▼吾郷玲人君は堺市車之町東一丁目九〇一京屋洋服店、▼石丸春峯君は晴明と改號

前號の正誤

六頁傳言板(對つと、を、明、れ、大、門、九、頁、病、院、が、第、二、故、郷、な、り、松、生、吾、貢、湖、煙、は、一、直、線、に、の、び、美

投稿規定

- ▼ 投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
- ▼ 「近作柳槽」は全家の雜吟を募る
- ▼ 「川柳塔」への投句は同人に限る。
- ▼ 各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事。
- ▼ 文章は二十字詰半紙判原稿紙に詰める事。
- ▼ 書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記する事。
- ▼ 締切は嚴守されたし。
- ▼ 投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募 集

第十二卷第十二號課題

十月五日締切

(各題十句以内)

馴 染

西 田 艸 樂選
吉 田 水 車選

第十二卷第一號課題

十一月五日締切

(各題十句以内)

寫 眞

阿 部 閑 生選
前 田 五 健選

每 號 募 集

近作柳槽(十句) 麻 生 路 郎選

各地柳壇(會報)

文章(評論研究感想吟行漫文)

社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定 價

一 部 金 參 拾 錢
半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
壹箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢

廣 告 料

本誌への廣告に就きましは本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中にも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和九年九月廿五日印刷
昭和九年十月一日發行

第十二卷 第十號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻 生 幸 一 郎
大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
發行所 川 柳 雜 誌 社
大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
電話天下茶屋二五七九番

大阪市住吉區平野西之町八三番地

川 柳 雜 誌 社

振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一六七〇番

無 斷 禁 載

賣 捌 店

(大阪) 大賣捌二盛社書店(明文堂 其他 市内各書店)
(東京) 仲見世玉森堂(神戸) 米田、寶文館(函館) 石塚
京都 三宅(名古屋) 靜觀堂

(順はろい)

川柳雜誌關係人の々

賛助員

末弘殿太郎

池澤樂居 長谷川一徹 大道弘雄 岡本平方 片岡直方 笠原路生 嘉納純純 田中辰二 長崎柳秀 長岡半太郎 長野晴演 國枝史郎 藤村卯之助 藤本卯之助 類原退藏 赤井清司 淺田清一

伊藤彦造 鳥山一歩 大島瀧明 大谷五三郎 大西長三郎 岡田三子 龜井辰修 川上三太郎 川村あんな 米村孝介 田脇素文 谷脇波樓 窪田銀吉 長野吉高 安川久美 前田雀郎

同

前田五健 柴谷春雨 篠原省二 藤里好古 小森不浪 小林東魚 岩崎柳路 石曾根民 市場没食 長谷川三汀 西村山月 大西鶴喜 大西八歩 谷村八穂 立井登美坊 中西おさむ

中澤濁水 村松雨 山下柳子 松本小柳 增位汀 奥野禿 丘野舟 熊谷紅 江戶みつ 福田鶴峰 阿形一杉 明石柳次 近藤藤勇 後藤青兒 吉田水車 吉田啞車 眞田幸捐 笹田角丸

同

喜多春秋 宮岡白峰 三輪夏曉 水谷美曉 芝田四葉 清友帆 平井若帆 日野春太 野田夕鐘 東谷華水 平井興路 井田三郎 毛利波 妹尾變人 須崎豆秋 首藤竹楓

春元紀太 高橋かほる 永田里十九 山本丹九 朝田新水 阿部生 關本雅幽 庄萬よ 編輯局(同人)

道頓堀支部(大阪市)幹事庄 九三會支部(大阪市)幹事北山 神戸支部(神戸市)幹事首藤 函館支部(函館市)幹事龜澤 高知支部(高知市)幹事春水 梅田支部(大阪市)幹事水谷 釜ヶ池支部(大阪府)幹事三谷 田邊支部(和歌山)幹事辻 笹川支部(和歌山)幹事尼 京都市支部(京都市)幹事平岩 鳥取支部(鳥取市)幹事中山

堺支部(堺市)幹事八木美夜路 松山支部(松山市)幹事石丸晴朗 御旅支部(大阪市)幹事生田翠夢 天王寺支部(大阪市)幹事妹尾豆秋 鶴町支部(大阪市)幹事須崎變人 御池橋支部(大阪市)幹事西わ 松江支部(松江市)幹事梶谷卷二 塗青支部(大阪市)幹事熊谷紅 大鐵局支部(大阪市)幹事植山九天 西條支部(愛媛縣)幹事荒井英賀夫 光糴會(大阪市)幹事竹内機見女

住吉支部(大阪市)幹事奥野禿山 北濱支部(大阪市)幹事谷村稔 今里支部(大阪市)幹事江場沒食子 奉天支部(奉天)幹事江戸みつる 八東支部(奉天)幹事平塚亂笑 玉造支部(大阪市)幹事清水友帆 今治支部(今治)幹事渡邊曉童 光笑會(大阪市)幹事永田里十九 新居濱支部(愛媛)幹事越智虹子 伯耆支部(鳥取)幹事三鴨美笑 竹原支部(廣島)幹事町田承春

生田翠夢 麻田生 福田雨樓 西田雨樓 橋本綠雨 編輯局(同人) 庄萬よ 關本雅幽 阿部生 朝田新水 山本丹九 永田里十九 高橋かほる 春元紀太

川柳雜誌案内

六巻活字十四字面三行金五十銭、一行増すと
 ごとし金十銭（但し贈り手代用券）、その他
 改題、修題、句會案内、柳葉廣告、その他

並製合本特賣

「川柳雜誌」の合本第二卷
 より十卷まで

各壹卷 金壹圓五十銭
 大阪市内送料 壹册六銭
 市外送料 壹册廿四銭
 大阪市住吉區平野西之町八三
 申込所 川柳雜誌社

懸賞川柳募集

題「紅葉」路郎 選
 十月十日締切

その他雑吟を募る
 ▼用紙 官製ハガキ（化粧柳
 葉と明記の事）
 ▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す
 ▼投吟所
 大阪市玉出本通三の三六
 麻生路郎氏宛
 化粧新聞社

川柳まやり

菊判每號七十數頁
 毎月一日發行一部廿五銭
 東京淺草區小島町二の二七
 川柳まやり吟社
 （取次所）川柳雜誌社事務所

蒐集

▼新聞、雜誌（川柳の雜）に
 掲載ある川柳に關する記
 事の「切抜」

▼川柳家の集合寫眞、個人
 寫眞
 ▼川柳の短冊、色紙
 右の品雜誌の編輯上必要に付
 御贈與下さい。

大阪市住吉區平野西之町八三
 橋本綠雨

螢ヶ池句會

日時 十月七日午後一時
 所 刀根山病院

題 「車、足音」各五句

光笑會

日時 十月十一日夜
 所 カナメ喫茶店

題 「開店」三句 豆秋選

吟柳社吟行

十月十三日（土）午後一時
 湊町驛集合 市中徒歩にて住
 吉神社へ

題 「石、疲勞、神社」山雨樓選
 會費 二十銭
 幹事 植山九天

柳壇近況

一、川柳家の消息
 一、柳界ニュース
 ▼その他の主なる諸事項を本誌にて紹介を致しますから皆
 様から御投稿を願ひます。
 ▼採否は編輯局一任のこと。
 大阪市住吉區平野西之町八三
 川柳雜誌社編輯局

道ブラから天牛本店

賣書買籍
 大阪市南區日本橋南詰東入南側
 電話 南二七四九番

綠雨居偶會

日時 十月九日夜
 題 「給仕」三句

當夜全國の柳誌をみながら
 語りませう。
 大阪市住吉區平野
 西之町八三
 橋本綠雨
 市バス平野線
 今川町東南三丁

川柳手拭
 路郎主幹の染筆
 金二拾銭（送料共）

社告

本社の例會案内希望の方は左
 記へお知らせをお願いします
 大阪市住吉區旭町三ノ一四
 會報係 須崎 豆秋

關西旅行協會主催大社參拜團募集

關西旅行協會は本年五月城崎溫泉行團體五百五十名
 (第一回)本年八月伊豆半島箱根富士湖廻り團體六
 十名(第二回)は各位の御好意により盛功裡に舉行仕
 り旅行後各位より種々の禮狀を頂戴仕り候此度第三
 回大社參拜團を募集候付前記以上の準備にて手落な
 きサービスを用意候付幸ひ御賛成御申込の程願上候
 祭日と日曜を利用して

深 秋

上古神代の國、古事記の御社
 大 社 參 拜
 「途中」三保關、松江、岡山後樂園

「途中」三保關、松江、岡山後樂園

一、期 日 六月三日夕大坂發、七月四日夕七時大坂着

一、募 集 人 員 五 百 名
 一、會 費 拾 一 圓 (但子供七圓五拾錢)
 汽車、汽船賃、宿泊料、茶代祝儀、朝食三回
 徽章等

一、申 込 金 參 圓 也

一、行 程 (豫定時刻)十一月二日 午後七時大坂發
 十一月三日 午前六時境港着、汽船にて午前十時

三保關着朝食(旅館)午後一時三十分松江發、午後
 松江着晝食(旅館)午後一時三十分松江發、午後

四時二十分大社着、大社參拜(泊)
 十一月四日 午前七時發、日御崎(自動車にて往復

一、午前九時大社發、途中(列車中晝食、午後一
 時三十分岡山着、後樂園見物、午後三時三十分

岡山發、大阪着午後七時三十分
 道 頓 堀 新 戎 橋

主 催 關 西 旅 行 協 會

電 南 六 六 〇 三 番

後 援 萬 葉 集 プ レ ー カ イ ド

開 店 御 披 露

喫 茶
 洋 食
 支那料理

大阪市南區疊屋町六番地

カ ナ メ

店主 永田 賢次

號 里 十 九

謝 颯 風 御 見 舞

阪神地方は天津浪費來致し小生
 ら船にて逃れ家族一同無事に付
 御安心被下度候

兵庫縣魚崎町五九八ノ二

住 田 亂 耽

謹啓此の度の災害に際し多大なる御
 配慮を辱し奉感謝候御蔭を以て無事
 去る廿六日左記へ轉居仕り候間御通
 知旁々御厚禮申上候 敬具

轉居

大阪市住吉區駒川町七丁目十三番地
 大鐵線針中野驛北へ中野市場裏川筋

關 本 雅 幽

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

ドーマポ椿豆伊

精の椿島大 一唯産國

輝く美髪



伊豆椿香油本舗

いさ下用愛御に直今
りわに店薬品粧化名有國全

にきびとく 美顔水

ご家庭に常備せられたさ

美容衛生薬

ニキビ吹出物に第一等の良薬である上に、日常美容薬としても勝れた効果があるので男女共に広く賞用されてゐます

主なる用途

- ▲ ニキビ吹出物の治療と豫防に
- ▲ 洗顔後、入浴後、お顔剃り後等のお肌の保護と整美に
- ▲ 美容薬として御常用に
- ▲ 露・蚊・南京甲等の毒虫にさされた時に
- ▲ 脂肪性の方のお化粧下に

定 價
35 セン
50 セン
1 エン

お徳用な新製品



大正十三年三月三日第三種郵便可(毎月一回)發行
昭和九年九月廿五日印刷
川柳誌
第一二九
定價 五三拾
送料 壹錢